
ネギま！に入った人。T S 憑依ver

鋹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！に入った人。TS 憑依ver

【Nコード】

N7307W

【作者名】

鏝

【あらすじ】

目が覚めたらアーチャー？ いや違う女だ。投影？ できない。あるのは使いこなすのが難しい三種の神器？ って感じのテンプレ？ な作品。

01 晴天霹靂（前書き）

三人称です。

どうしても書きたくなって書いた。後悔も反省もしていない。

01 晴天霹靂

茫然自失。

今の少年を表す最も端的かつ的確な言葉だろう。

理由は簡単である。

何故なら、少年が目覚めたのは森の中だったのだから。

「あー、説明が欲しい。」

小さな声で呟く。

当然反応はない。別に期待していたわけでも何でもないのだから。

ふと、視界の端に移る褐色の肌。

どうやら自分のもののようにだ。

「……………まさか、な。」

恐る恐る髪へ手を伸ばし、目の前に持ってくる。

それは、真っ白な髪だった。

——アーチャーですね。わかります。

未だに呆けたまま服装を確認すると灰色、いや、薄めの黒の着流し。いや、違う。袖がない。裾も短い。帯も細い。なんというか、変わった服装である。

しかし、某錬鉄の英雄にしてはやけに細腕である。視線も低い。訝しげにもう一度体を見下ろせば、変わった和服のようなもの、褐色の細い体、控えめな胸……………胸？

震える手を自らの股間に当て、愕然とした。

ない。

「——嘘、だろ。」

一体どこの二次創作だ。

一瞬、自暴自棄になりかけるが、すんでの所で持ち直す。

少年は賢かった。

もしこの身が錬鉄の英雄なら、自分の置かれた状況を、こうして確認するだろう、と即座に判断を下す。

トレース・オン
「同調開始」

小さく呟く。

しかし、反応はまったくない。

——別人、か。

泣きたくなる気持ちを抑え、これが夢であることを望む。

しかし、現実は無情。

起きてしまったことは変わらない。

——とりあえずは、場所を確認しよう。

少年、いや少女は歩き出す。

北へ、北へ。

暫くの間彷徨う。

自らがどちらに向かっているのかも分からない。

と、人の声のようなものが聞こえてきた。

少女は助かったとばかりに声の方向へ向かう。

そこでは、怪しげな格好をした男が、怪しげな言葉を呟いていた。
咄嗟に物陰に隠れて様子を窺う。

すぐに呟きが止まり、男の前に光り輝く魔法陣のようなものが描かれた。

少女は目を見開く。

当然だろう。いきなり目の前に一匹の巨大な鬼が現れたのだから。

彼女は物陰に隠れている。

だが、本能的な恐怖からか、無意識に後ずさってしまった。

ここは森である。

小さな枝を踏み抜いた時、なにが起きるかは明らかだろう。

パキッ。

小さな高い音。

男がこつちを向き、

「やれ。」

言った。

「すまんな嬢ちゃん。これも仕事なんや。」

弾かれたように走り出す少女を追う、大きな鬼。

少女の速度はその小さな体からは考えられないものだったが、歩幅が違いすぎる。

やがて追い詰められる。

——洒落んなんねえよ畜生……！

少女は、振り上げられる棍棒の動きが、やけに遅く感じた。

少女は思う。

——死にたくない、死にたくない、死にたくない！

振り下ろされはじめた棍棒。

少女は願う。

——嫌だ……！！

ガキーン！

死を拒否しながら瞑っていた目を開けると、棍棒が目の前で止まっていた。

いや、正確には違う。

受け止められていた。

突如現れた、円盤によって。

——これは、なんだ。

少女がそう考えた瞬間、頭に情報が流れ込む。

情報による頭痛によって膝をつくが、すぐに痛みは引き、頭には一つの情報が残った。

『八咫鏡』

天照大神が初代天皇にわたしたと云われる鏡だ。

コレはそういうものであるらしい。

試しに、右、と念じる。

鏡は右に少し動いた。

思った位置とは5cmほどずれていたが、振りかぶりなおした鬼を見て、軌道を予測する。

タイミングを計り………今！

見事棍棒を受け止めたはいが、攻撃ができない。

「なんや嬢ちゃん。闘えるんかいな。いや、楽しくなって来たでえ。」

——なにか攻撃の手段は…鏡で叩くか？

いや、駄目だ。あれは防御専門のようだし…。

何度も打ちつけられる棍棒を防ぐ。

平行線だ。

——攻撃、攻撃、攻撃！

何度も念じる。

………と、右手に感覚。

見れば、勾玉。

またしても情報が流れ込む。

頭痛は予期していた為、膝はつかなかった。

八尺瓊勾玉。

またしても神器だ。

少女は使い方に思考をやる。

勿論防御は続ける。

「どうした嬢ちゃん、防ぐだけかいな。」

投擲しろと？

コントロールのなさに自信のある少女だが、それ以外に方法はないらしい。

振りかぶり、投げつける。

とんでもない速度で飛ぶ勾玉。

明後日の方向へ。

着弾した木を粉碎した。

「と、んでもねえな」

しかし、もう勾玉は……………え？

少女は呆然とする。

左手にはまた、勾玉があったのだから。

——だけど、今じゃ牽制にしか使えない。

当たらないのだから。

この鬼を倒すだけのモノ。

今度は一度で現れた。

両刃の剣。

銘を『天叢雲剣』。

これで、三種の神器が揃った。

少女はもう二度目になる頭痛に顔をしかめながら、隙を窺う。

防御ばかりする少女に痺れを切らした鬼が、大きく振りかぶる。

——ここだ！

少女は勾玉を消し——念じればすぐに消えた——、両手で天叢雲剣を構え、振り抜く！

ズパン！！

「……………え」

少女はまたしても啞然とする。

無理もないだろう。持っていた剣が、刃渡り2 mにもなろうかという大剣になっていたのだから。

鬼は消えた。

命の危険が去った安堵からか、膝の力が抜ける。

そのまま、フツ、と意識を手放した。

一方その頃、とある青年。

青年は侵入者の排除を命じられていた。

侵入者は言う。

「俺が呼び出した鬼なら、餓鬼を潰しにいつてゐるぜ。今頃惨殺死体にでもなってグベツ！」

台詞を最後まで言うことは出来ない。

青年によって意識を奪われる。

侵入者はすぐに捉えられ、青年は子供が生きていることを願って仲間に連絡する。

およそ5分後に、少女は無傷で保護されることになる。

しかし、鬼は消えていた。

一体だれが倒したのか。

誰もが疑問に思う。

01 晴天霹靂（後書き）

酷い出来だ。

02 知人出現（前書き）

ちようにどいい四字熟語がない（泣）

02 知人出現

目を覚ますと、知らない天井だった。

どこかの病室のようだ。

「やっぱり夢……じゃないか。」

自分の肌を確認した少女はひとりごちる。

ふと、先程、なのかはわからないが、出した三種の神器について思い出した。

イメージを固める。

用途は防御。

形状は円盤。

銘は――

「『八咫鏡』」

無意識の内に、言葉が漏れる。

上に向けた掌の、5cm程上に、深緑色の鏡が浮いていた。

直径は30cm程。

「少し、小さいな…」

正直な感想を言うと、直径が40cm程まで大きくなった。

そこまで調べたところで、扉の向こうから足音が聞こえてきた。

咄嗟に八咫鏡を消す。

扉が開き、入ってきたのは、くたびれたスーツに煙草の似合う、渋い青年だった。

どこかで見たような外見に、少女は眉を顰める。

——まさか、な。

小さく動いた唇を、青年は見逃さなかった。

「どうかしたのかい？」

これもまた、どこかで聞いた覚えのある声。

少女は必死に否定する。

ありえない、と。

「君は森の中で倒れていたんだ。」

だが、ある人は言った。

——ありえないなんてことはありえない

「ああ、そういえば自己紹介もしないうちにまくし立ててしまったね。」

「僕の名前は——」

そして続く言葉に、否定していた現実を見せつけられることになる。

「——タカミチ・T・高畑。」

「な——」

絶句する少女。

それでも最後の望みを持って、聞く。

「——ここは、何処だ？」

まさか、まさか本当に、

「？埼玉県麻帆良市だよ？」

俺はネギまに入ってしまったのか。

思考が停止し、小さく手が震える。

「だ、大丈夫かい？」

心配する声に思考を取り戻し、小さく頷く。

少女は考える。

自分に異能が使えるのは何故？
それはこの体の力だろう。

憑依？

その可能性が高い。

だけど原作にはこんなのは――

「うつ……」

原作？

まずい、内容が思い出せない。

「どうかしたのかい？」

タカミチの存在を忘れていた。

「い、いや、なんでも。」

少し慌てて返答する。

少女は再び黙考した。

――恐らく自分はこれから身元を聞かれるだろう。

正直に話すのは不味いし、信じてもらえるとは思えない。

単純だが、記憶喪失で行けるか？

……いや、たしか記憶を覗く魔法があった筈だ。

最初は適当に誤魔化して、魔法がレジストできればよし、出来なけ

れば全てばれて終わる。

そうしたら全部話せばいいだろう。

行き当たりばったりな計画だが、ないよりましだろう。

「それで、名前はなんて言うんだい？」

「……てらすましん照天真。」

一瞬逡巡したが、今までと同じ名前を名乗ることにした。

「じゃあ、照天君には今から聞きたいことがあるんだ。一緒に来てくれるかい？」

拒否権はないだろう。

麻帆良に真のような外見の女子などいないのだから。

こんな状況にも関わらず、案外冷静な自分に驚きながら、タカミチについていく。

たどり着いたのは、立派な扉の部屋だった。

『学園長室』と書いてある。

タカミチがノックすると、

―入ってくれ

低い声が聞こえた。

開かれた扉の向こうには、後頭部の異常に長い老人。

少し自分の思考がしにくくなったのを感じる。記憶捜査か。

「うわ…」

真は思わず呟いてしまった。

それほどまでに立派な後頭部だったのだ。

幸い誰にも聞き咎められずにすんだ。

「照天真くんじゃな。ワシはここで学園長をしておる、近衛近左右衛門という。」

そう言って手を差し出す老人。

真も手を出し、握手をした。

「照天真だ。よろしく頼む。」

自己紹介を終えたところで、学園長は切り出す。

「お主は、見たかの？」

――鬼を。

言葉には出さずに聞いてくる。

威圧感を感じる。人の上に立つものの力か。

真は、暫く考え、

「……………」

誤魔化すことにした。

恐らく記憶捜査が掛かっているだろう。

暫く何も言わずに黙り込む。

威圧に負けているようにも見えるだろう。

と、突然頭の靄が晴れたような感覚がする。

「ふむ…なにも覚えていないか…。しかし、これでは記憶喪失じゃぞ。」

魔法はレジストできたようだ。

真は小さく安堵の溜め息をついた。

——正直、2%にも満たない成功率だと考えていたんだがな。

「ふむ。それで、照天君は今何歳になる？」

肉体年齢など知るはずもない。

この体に入ったのはつい先程なのだから。だが、口から無意識に答

えは零れた。

これがご都合主義か。

「13。」

もしかしたら肉体の記憶のような何かかもしれない、と真は考える。

「ふむ……住所は分かるかの？」

真は黙ってかぶりを振った。

この世界には自分の住んでいた地名はないかもしれない。

疑問を持たれるとまずい。

「他にになにか覚えていることはないかね？」

再び首を横に振る。

「分かったぞい。では、君は麻帆良で生活してもらう。」

願ってもない申し出だ。

だが、真は疑っていた。

——あまりにもとん拍子だ。

学園長が何かを考えているのは間違いない。

問題はそれがなにか、ということ。

自分に危険が及ぶのは御免だ。

「……………何故だ？」

「なに、戸籍もない君を警察に突き出してもつまらな……………もとい、こちらで保護したからには責任を、と思っただ。」

間違いなく前半が本音だ。

真は内心苦笑しながら頷く。

「頼む、学園長。」

「ふおっふおっふおっ。まかせておきなさい。病室で待っていてくれるかの？」

失礼しました、と言い残して学園長室から出て行く真。

それを見送ったタカミチは学園長に話しかけた。

「彼女、本当になにも覚えていないんですか？」

敵意も殺気も警戒心も、何もないように見えたが、立ち振る舞いに隙がなかった。

学園長は、心なしか苦い顔で言う。

「自分の生い立ちについては本当に何も覚えていないようなんじやが…『何か』に追いかけられたこと位は覚えているのかもしれないの

…」

「だったら、忘れさせないんですか？」

タカミチにそう聞かれた学園長は自信をもって答えた。

「ワシと話してもなにも言わなかったんじゃ。問題ないじゃろう。」

そして、納得したようないないような顔をしたタカミチも退出すると、学園長は呟いた。

「しかし、鬼は何処へ消えたんじやろうかの？照天真よ。」

それは、誰にも聞かれることはなかった。



一方、病室に戻った真。

部屋には荷物をまとめようと思って来たのだが、身一つで来ていたことに気づき、様子見がてら暫くの間八咫鏡を弄る。すると、全身に疲れ。

——体力使うのか…

使いどころを考えた方がいいと考え、消す。

これで「投影開始」って言うのも悪くないな、とぼんやりと思いながら、ベッドに横たわった。

暫く目を開けたまま横たわっていると、扉が開き、タカミチが入ってくる。

「やあ。」

「どうも。」

これからの俺の住居についてかな？と思う。

よく考えたら、自分は女だ。

よもや女子寮になど入れられないだろうか。

「これからの君の家のことなんだけどね？君には麻帆良女子中学校に入ってもらって、生活は女子寮でもらう。いいね？」

思った通り、それも悪い方向の予感が当たり、枕に顔をうずめて悶えたい衝動にかられたが、なんとか抑える。

仮にも恩人の前なのだ。

「……………分かった。」

まあ、恩人にタメ口ということについては全く気にしないのが真である。

「じゃあ、着いてきて。」

歩き出してほどなく、前方に言い争う二人組と、脇で見守る一人の女の子に遭遇した。

タカミチを見上げると、やれやれ、とでも言いたげな顔で苦笑し、そこに歩いていった。

「やあ、アスナくん、雪広くん、木乃香くん。」

「たたた高畑先生ッ！こんにちはっ！」

「ごきげんよう高畑先生。」

「こんにちは先生。」

みんながみんな揃って、驚く程に整った容姿をしている。

そういえば自分の顔見てないな、と喧嘩をとりなすタカミチの横でぼけーっと考える真。

「なあなあ、うち近衛木乃香っていうんよ。はじめまして。名前覚えてくれへん？」

突然話しかけられて驚き、少し遅れて返答する。

「…照天真。」

褐色肌に白髪、変な和服を来た少女に平気で話しかけることにも驚いたせいか、いくぶんそっけない挨拶。

しかし木乃香は全く気にせず言葉が続ける。

「何してるところだったん？デート？」

その精神的を遺憾なく発揮し、初対面の相手に対して図々しくも感じられる言葉。

それを聞いた真は自らが元々男だったため、眉をぴくりと動かす。だが、聞いていたのは真だけではなかった。

「でででデートおお！？」

先程の挨拶で過剰とも言える挨拶をしていた少女が鬼気迫る表情で真とタカミチを見る。

その顔たるや、真が思わず後ずさる程である。

ニヤニヤ笑いを浮かべる残りの二人の少女をちらりと見てから、真は迷わず言った。

「寮まで案内してもらってるだけだ。」

「本当に？」

「当たり前だ。俺にそっち——いや、なんでもない。デートじゃない。」

俺にそっちの趣味はない。

言いそうになってから踏みとどまる。

今の真の姿は女なのだ。

そんなことを言うことは出来ない。

なおも訝しげな表情をした少女に、タカミチが「本当のことだよアスナ君」と助け舟をだし、漸く疑いが晴れる。

真は助けてくれたことに感謝しつつも、いくらか遅かったのではな
いか、と軽くタカミチを睨む。

すぐに視線を外し、残る二人に自己紹介。

それぞれ神楽坂明日奈、雪広あやかと言うらしい。

少女達の見た目のため、生来の愛想のなさに磨きがかかり、取っ
きにくそうな印象を残してしまったかもしれない、と少し後悔しな
がらも、少女達と別れて歩き出す真とタカミチ。

アスナ達は自分達も一緒に行く、と言っていたが、あやかが自分達
に用事があると言い、忘れていたらしいアスナと木乃香は渋々戻っ
ていった。

寮に入り、1人部屋のため同室に女の子がいないことを知る。歓喜
と僅かな不満を残しながらタカミチに礼を言う。

明日から学校だから、しっかり起きるんだよ、と言い残してタカミ
チが出て行く。

1人になった真は軽くシャワーを浴び、布団に潜り込む。

タカミチが明日からの日用品だ、と言って残して言った荷物は、部
屋の隅に置いておいた。

思いの外順応している自分に気づき、驚きながらも、八咫鏡による
疲れにより、いつのまにか真の瞼は閉じられていた。

02 知人出現（後書き）

短い？

03 登校初日（前書き）

今までと文字数自体はあんまり変わらないんですが…

改行が少ないので短く見えるかもしれません。

03 登校初日

翌朝。

真は予定より15分ほど早く目が覚めた。

着ていた和服(?)を脱ぎ、シャワーを浴びる。

脱いだ物は脇に畳んでおく。

後々洗濯する物としてまとめることにした。

熱めの湯を被りながら、今日の大まかな予定を頭の中で反芻する。

ふとバスルームの鏡をみると、憮然とした顔——これは真の生まれつきだ——でこちらを見る褐色肌に白髪の美少女がいた。白髪は自然な色で、染めていないことが一目でわかる。

通常、白髪と言う物は髪質が堅いのだが、自分の物は比較的やわらかかった。

生まれつきのものなのだろうか。

数分してからシャワーから出、バスタオルを下半身にのみ巻きつけて昨日タカミチが置いていった荷物の紐を解く。

出てきたのは、

「くそ、やられた：！」

女子の制服だった。

取り敢えず放置し、もう一度和服(?)を着込む。
汗もかいていないので比較的清潔だろう。

その後、朝食を取っていると、タカミチがやってくる。
真は無言で立ち上がり、タカミチの正面に立つ。

右手には制服を掴んでいる。

「な…なになかな？」

「ズボンにしてくれ。」

相変わらず無愛想・無遠慮な自分に辟易としながらもスカートを差し出す。

「いや、それが規定の制服だから…」

困った顔で頼みを拒否するタカミチに少し同情するが、それとこれとは話が別だ。

真は多少強引にでも押し切ろうとする。

「これは無理だ。」

「えーっと、それは履けないってことかい？」

無言で頷く。もしかしたらスカートを履かずに済むかもしれない、
と思い、真の表情は心なしか柔らかいものになる。

それを見たタカミチは一瞬驚いた顔をするが、すぐに少し嬉しそう
にも見える顔で問いかけてきた。

「何で履けないんだい？」

もったもな疑問だが、真は今、当たり前だろうが！じゃあお前は履

けるのか！？と言いたくなかった。自分の肉体性別を考えるとさえないが。

「…………履き慣れていない。」

理由をぼかして伝えようと思ったが、これが中々難しい。思いついたことを口にしたのだが、タカミチはぷつ、と噴き出した。

「ははは、なら今から慣れればいい。お洒落だしね。」

ここからはもう押し問答である。

「興味がない。」

あつてたまるかあああ！とでも叫び出しそうな顔。

「まあまあ、そう言わず。」

「…恥ずかしい。」

「そんなことはないさ。それに規定は曲げられないからね。」

結局それが言いたいことのようなのだ。

最終的に折れたのは真で、スカートを履くことになった。さらには中にスパッツをまで履かされた。

スカートを履いた後にスースーして気持ちが悪く、タカミチの目の前で弄っていたところ、「女の子なんだから、恥じらいを持たないとね。」と言わ、スパッツを着用することになった。この際、またしても押し問答が繰り広げられたというのは、余談である。

タカミチを待たせて朝食を済ませてから寮を出る。
先導するタカミチを恨みがましい目で見ながら、真達は職員室へと向かう。

教師達に一通りの挨拶——名前と年齢を言うだけのもの——を済ませた真は、未だに気になるスカートのひらひらをまとめている。

「はい、ストップ。」

タカミチに止められ、これ以上恥ずかしいことをさせられてはたまらないとばかりに慌てて手を離す。

タカミチは愛想のない言葉とその可愛らしい（？）行動のギャップに微笑みながら次の予定を切り出した。

「じゃあこれから、真君が入るクラスに案内するよ。ついて来てくれるかい。」

そう言って歩き出すタカミチに少し離れてついて行く真は、タカミチが自分のことを君づけで呼ぶのは、自分の本当の性別に気付いているのではないか、だったらスカートを履かせて遊んでいるんじゃないのか、とあらぬ誤解を重ねていた。

昨日、アスナ達のこと君づけだったことを都合よく忘れた誤解である。

こうして真の中でのタカミチの株は暴落していった。

……この誤解が解けた際に、また小さな騒動が起きるのだが、後に書くこととする。

閑話休題。

しばらく女子中エリアを歩くと、『1―A』とかかれた教室の前に出た。

「ここで待っててね。」と言って教室に入っていくタカミチ。それなりに高度な罫をもっともせずに教室に入っていく。少々唾然としながらも表情は変わらないのが真だ。

中から「今日は転校生を紹介します」「そんな！私の情報網に引つかからないなんて！」と言った声が聞こえてくる。

一通りの騒ぎが収まると、真を呼ぶ声が聞こえてきた。

無言で扉を開ける。教室の隅の方に、自分と似た肌の色、髪色をした子がいた。顔には奇妙な化粧。何故か少し怯えているようにも見える。

ふと真は、自分が入ってきたことで身構えた生徒がいた事に気付いた。

金髪の美少：幼女。特徴的な髪型――サイドポニーだったか――をし、竹刀ケースを脇に抱えた美少女、色黒で高身長、ギターケースを抱えた美少：美女。

周りよりは警戒度が低いものの、探るような目をした高身長で糸目の美少女。

……全員に美がつくのは仕方がないことだろう、と真は心の中で呟く。

教室に入ってからこれまで、3秒。

教卓の横に立つと、すぐにタカミチから自己紹介を促す声がかかる。

「：照天真だ。よろしく頼む。」

言葉少なく挨拶をする。

このクラスの生徒は総じてレベルが高すぎる。

そんな中で注目を集めれば誰でも言葉数は減るだろう。
普通ならここで興味を失う筈なのだが、ここは1―A。

「「「「か」」」」

………か？

「「「「可愛い」」」」！「「「「」」」」

――は？

呆然とする真に、少女達は質問を浴びせかける。

「肌きれー！」「髪は生まれつきー？」「どこから来たのー？」
日本人ー？」「細ーい！」

大勢に囲まれ慣れない真は大きく狼狽える。

「はいはーい、転入生も困ってるでしょー！」

この声に助かった、と溜め息をついた――

「というわけで質問は私がしまーす！」

――真の表情が固まった。

「いや、質問は「私は朝倉和美。まず生年月日は？」……………」

言葉を遮られ、黙り込んだ真に和美は言い募る。

「生年月日は？」

「……………知らん。」

今度はクラスメート＋タカミチの顔が固まる。

仕方がないだろう、知らないのだから。

本当の生年月日を答えれば学年と齟齬が生じる。

まあ親がいないから仕方がないと言えはなんとかなるだろう。

そんなことを考えていると、まず和美が再起動した。ジャーナリスト、恐るべし。

「えーっと、なんか複雑な事情があるみたいだね…うん、じゃあ次、趣味と特技は？」

趣味…と言えはやはり。

「…バスケだ。」

“向こう”にいた時からの数少ない趣味と言えるものだ。

真の技術は、当時のあまり高くない身体能力を逆手に取ったもの。

『柔を以て剛を制す』を体現したモノ。

「へえー、じゃあこっちではバスケ部に入るの？」

一瞬、躊躇う。

入るとすれば女子バスケ部となるだろう。女子とバスケ、というの

はどうにもやりづらい。

「まだ決めていない。」

これを言った瞬間、クラスの前の方にいる生徒が残念そうな顔をした。

恐らくバスケ部なのだろう、と真は考える。

「身長と体重を教えて。」

これを聞いた真はタカミチに助けを求めるような視線をやる。身長体重など知るわけがない。

タカミチは一瞬考えると、真から目を逸らしながら言った。

「彼女は色々複雑でね。あんまりプロフィールとかを覚えていないんだ。そのあたりは察してあげてくれるかい？」

バカ正直に言い過ぎだ！下手に同情を買っても迷惑なだけ――

「ふーん…ごめんね、変なこと聞いちゃって。」

やっぱりか…

どうするんだよ、とタカミチに責めるような視線。

苦笑いをして誤魔化そうとしても無駄だ。

しかしやはり予想の斜め上に行くのがこのクラスである。

「じゃあ最後、このクラスで気になる子は？」

一瞬、呆気にとられた。

しかし、すぐにその表情は小さな笑みに変わる。

「ここでもなら、やっていけそうだ…」

「ん？今なにか？」

すぐに反応した和美に黙って首を振る。

和美はすぐに興味を失い、質問の答えを催促してきた。

しかし、女子校に転入してきた女子に気になる子を聞くとは…百合趣味が多いのか？と少々真剣に考えるが、いい加減答えなくては和美の目がヤバイ。

「…特には。」

実際にはクラス全員に興味深々なのだが、生憎と真はそれを正直に口に出来る程器用ではなかった。

そうして質問は終わり、授業の時間となる。

“向こう”での真は劣等生。

『寡黙なる劣等生』と呼ばれる程。
サイレント・バカ

友達が少ないにも関わらず、非常に有名だった。

これより、どれだけバカだったかがうかがえるだろう。

これを聞いたときの真は、

「勉強は嫌いなんだよ」

と言いつつのように呟いたそう。

当然、いくら既にやったものでも、中学一年生の内容の半分しか理解出来ない。

一、二、三限が終わり、既に諦めた真はタカミチの授業で寝るとい

う暴挙に出る。そして見事なチョーク投擲を頂くこととなった。

昼休み。

真は痛む額をさすりながら顰めっ面で食堂へ向かっていた。

クラスメート達は無愛想な真にもよく接してくれ、真は早くもある程度馴染むことができそうだな、と思う。

誘ってくれた明石裕奈、和泉亜子、大河内アキラ、佐々木まき絵に感謝しつつ食堂へと向かう。

裕奈にバスケット部に入るように頼まれながら、真はぼんやりと食堂を見渡した。

……監視されている。

ギターケースを持った色黒の子——中学生とは思えないな——とサイドポニーの少女に、ロボットのような球体関節を持つ少女——というかロボットだろう——。

どういふつもりかは分からないが、暫くは八咫鏡などは出さないほうがいいだろう、と真は考えた。

ちなみに、裕奈には後日必ずバスケット部を見学だけでもするように約束を取り付けられた。

もとより真としてもその位はするつもりだったのだが。

そして放課後。

ちんぷんかんぷんな授業がついに終わり、真は屋上へと来ていた。
扉のある小さな出っ張ったところの上になり、横になる。
そのまま、真は授業の疲れからか、浅い眠りについた。

03 登校初日（後書き）

もう一個の作品『ネギま！に入った人。』も読んでくれると嬉しいです。

04 話題展開（前書き）

題名は四字熟語ではありません。

漢字四字ですけどね！。

04 話題展開

「……まどの……………照天殿！」

変わった呼び方で名を呼ばれ、真は目を覚ました。

自分は屋上で寝ていたようだ。

目の前には、確か…長瀬楓、だったか、最初に、探るような目をして
いたクラスメート。

「…俺に何か用か？」

いつも通りの口調で問いかける。それに対する楓の返事は、

「ちょっとついて来てもらうでござるよ」

というものだった。

当然真も黙って着いていくはずもなく。

「…用があるんじゃないのか？」

怪訝な顔をして聞き返す。

楓は一瞬困った顔をするが、すぐに返答。

「教室での用でござるからな。」

そう言うと、これ以上の問答は無用だ、とばかりに真をひょいと抱
える。

所謂お姫様抱っこというヤツだ。

しかし当然というべきか、真は男としての矜持を持つ。

「なっ、やめろ！」

楓に怪我をさせないように気遣いながらも暴れる。

しかしその気遣いのせいか、楓の腕からは逃れられない。
真の顔は赤く染まっていた。

怒りか、羞恥か。

「離せ！自分で歩く！」

しかし楓はにやにやと底意地の悪そうな笑顔を浮かべてひよいひよ
いと歩く。

一体この細腕のどこにそんな力が隠されているのか。
真は暴れながらも感心していた。

結局、教室まで連れてこられてしまった。

「ここで降ろしてくれ。」

扉の前で楓に頼み込む。

思い切り暴れるのは無理だ。

楓は女子。傷つけるのは許されない。

隠れフェミニストだった真は女子を傷つけることをしたがらない。

しかし相変わらぬのにやにや顔。

既に半分涙目の真を抱えたまま扉を開く。

パァーン！

同時に鳴り響くクラッカーの音。

「照天さん、転入おめでとー！」

一瞬目を見開いた真の表情はすぐに小さく綻ぶ。
もちろん、美少女がお姫様抱っこされ、赤くなった状態でそんなことをすれば、

「きゃーーーーー！！！！可愛いーーーー！」

こうなる。

もみくちゃにされ、息も絶え絶えに乱れた着衣を直す様子は、非常にエロチックだった、と記しておこう。

一度落ち着いてから、改めてクラスメートと挨拶を交わす。
これで大体の名前と顔は一致するだろう。

真は端っこの方でジュースをちびちびと飲みながら、今後どうするかを考えていた。

自分が魔法に関係することは誰にもバラさず、かつ自分の身は自分で守れる程度に強くなる必要がある。

“向こう”で習わされた格闘技、というか蹴術。

それを上手く生かしつつ、切り札として神器を使う。

そこまで考えたところで、背後から声が掛かった。

「真ちゃんー？ちょっとええー？」

振り向くと、木乃香がほわほわした笑みを浮かべて立っていた。その可愛らしい笑顔に思わずドキリとするが、表情には出さずに返答した。

「…昨日ぶりだな。」

―あと、真ちゃんはやめてほしい。

そう続けて、木乃香を見る。

野原家のお子様みたいだからな。

木乃香は少し考えると、言った。

「んー…じゃあ、シンでええ？」

構わん、と頷く。

木乃香は、うんうんと満足げな表情を浮かべた後、こう続けた。

「今日、夜ご飯一緒に食べへん？うちが作るんやけど。」

ああ、と頷きかけて、はたと止まる。

…若い女子おんなこの部屋で食事というのは、いささかマズいのではないか。

「いや、済まないが今日は1人で…」

「いややの？」

不安げな顔。

真は女子のこういう表情に弱かった。
頭をガシガシとかいてから、

「…頂く」

と言う。

途端に花が咲くように笑った木乃香に、真は思わず見とれてしまった。

と、真は背筋に寒気を感じて小さく震えた。

約束をし、木乃香と別れた真はきよろきよろとあたりを見渡す。

——誰かに見られていた気がしたんだがな…

口の中で小さく呟くと、すぐに気を取りなおしてジュースをちびりと飲んだ。

一方、とある護衛少女の場合。

（私の視線に気付くか…やはり関係者か？だが魔力や気は感じん。
しかし、今朝のあの危機感…一体何者だ？）

真に対する不信任を募らせていた。

とある女スナイパーの場合。

（普段の言動では素人くさいが、要所要所では隙がない…。それだけの達人か…偶然か。魔眼も大した異常は示さない。だが最初に見

たときの怖気……。監視を続けるべきか。）

冷静に状況を判断していた。

とある吸血鬼幼女の場合。

（なんだアイツは？感じたことの……。いや、あれは不死殺し？何故人間のアイツがあんな気配を……。？関係者ではないようだが……）

経験外の事態に少々動揺していた。

とある純魔族少女の場合。

（……………キケン）

少々怯えつつ、警戒。

さて、こちらは無事歓迎会が終わり、部屋へ戻ってきた真。

部屋に入ると、真っ先に制服を脱ぎ、TシャツにGパンを着る。

夜になってから木乃香達の部屋に行くことにしているが、今はまだすることもなく、2〜3時間は余裕がある。

そこで、麻帆良内の散策を行うことにした。

本当は誰かに案内を頼んだ方がいいのだろうが、そこまで親しくなった生徒はいないため、1人で行くことにした。

バスケット部ももういないだろうし、コートを少し使っても大丈夫だろうか、と考えながら歩く。

「お、ねえちゃん可愛いね。ちょっと一緒にお茶しない？」

神様、俺が一体何をした？

真は深い溜め息を吐き、そのまま無視した。

これが下策だった。

ナンパをするような男は大抵、無視されるのを嫌がるものである。

「無視すんなや、なあ！」

真が、いい加減にしろ、といいかけたところで、誰かに肩を叩かれる。

振り返ると、タカミチがいた。

再びナンパ男の方を見ると、顔を青くしていた。

「で、で、デスメガネ…！」

やっぱり強いのかタカミチは。

しばらく無言で相對するが、すぐにナンパ男は耐えられなくなる。

「う、わあああああ！！」

ポケットからナイフを出し、飛びかかって行った。

タカミチはポケットに手をつっ込んだままの自然体。

と、タカミチから5、6mのところでナンパ男が突然倒れた。

……あれは拳圧だよな。

真にはぎりぎりで見る事ができた。

どうやらこの体は大分スペックが高いらしい。

自分の体を考察しつつ、タカミチに小さく礼を言う。

「…助かった」

大したことじゃあないさ、と微笑しながら言うタカミチに背を向け、歩き出す。

後ろから聞こえてくる、あまり遅くならない内に寮に戻るんだよ、という声に後ろを向いたまま手を振り、真は体育館に向かった。

本来の用事である散策のことは完璧に忘れていた真である。

10分程で体育館に辿り着き、軽い準備運動の後、鍵の開いている倉庫からボールを取り出してドリブルを始める。

仮想敵：“向こう”での強豪でいいか。

味方側のゴールから敵側のゴールへ。

低めのドリブル。しかし思ったより高く上がる。

ボールが軽いのか…？

調べてみるが、普通の重さだ。

しかし感じる重さは軽い。

やはりこの体はスペックが高い。

これからどう慣らすかが問題だな、と考えながら、手始めとしてバスケを続けていった。

30分程動かすと、驚くほどに体が馴染んだ。

——肉体が魂に引っ張られるってのは、本当にあるんだな。

頭の片隅でそう考えながら、気持ちのいいほどのダンクを決める。

“向こう”では高さが足りなかった。

高みからの見物、とばかりにリングからぶら下がり、周囲を見渡す。

……裕奈と目が合った。

ズンズンと歩いてくると、ガシッ！と真の肩を掴んだ。キラキラした目で、

「バスケット部に入ろう！」

と言ってきた。

真としても、しばらく体を動かして、やはりバスケット部に入りたいと思っていたところだったため、無言で頷く。

大喜びした裕奈に実力をもう少し知りたいと言われ、10点マッチの1on1をすることになった。

中央付近から始める。

ボールは裕奈から。

斬り込むようなドリブル。

隙を的確に狙ってくるタイプ。

相手のペースを崩して隙を作り出す真と少し似ているかもしれない。

普段の真ならばなんとか崩せるだろう。

しかし、大方馴染んだとはいえ以前とはスペックが違いすぎる。

身体に振り回されがちになってしまった真は、なんとか3点は取っ

たが、残りは持っていかれてしまった。

裕奈にも、

「その動きは本来力が弱い人のためのものなんじゃないか？新しく色々やりなおしたほうがいいかもだにゃー…」

と言われた。

その後も、夢中になって2人で練習した。

「マズッ…！」

「どうしたの？ってもう7時だ！」

気が付けば夕食の待ち合わせ時間30分前を切っていた。
急いで着替え、裕奈と一緒に走る。

「こっちが近道だよん！」

裕奈が細い脇道へと逸れる。

もしも真が焦っていなければ、絶対に選ばないであろう近道。

「な、なに…これ…」

一歩前で急に停止した裕奈の向こうには、おそらくは単独行動をし

ている巨大な蜘蛛。

術者の手に余ったか…？

いつでも裕奈を抱きかかえられるようにして、右手に勾玉を造る。

親指で右方向にはじくと、その辺りの木に当たり、半壊。

一瞬蜘蛛の注意が逸れた瞬間、裕奈を抱きかかえて蜘蛛を飛び越える。

「え？…きゃっ！」

腕の中で小さな悲鳴が聞こえる。意識を失わないとは、意外に精神が強い。

蜘蛛の顔面を踏み台にして後ろに着地し、そのまま走る。

カサカサと振り返る音が聞こえるが、そのタイムラグですでに20mは距離を開いた。

新しい身体、様々である。

しかし相手とはサイズが違う。

しばらく逃げると、追いつかれそうになった。

未だに呆然としている裕奈を下ろす。

「これからのことは、見ない方がいい。」

そう呟くと、右手の上に八咫鏡を出し、臨戦態勢に入った。

04 話題展開（後書き）

んー・・・

短い？

05 戦闘之後（前書き）

感想いただけると自分としても糧になるので。

気が向いたら送ってください。

05 戦闘之後

真と蜘蛛、両者が対峙する。

場は硬直。

一瞬の静寂の後、最初に動いたのは蜘蛛。

「キシャアアアア！」

奇声（？）を発しながら、真に向かって糸を飛ばす。

真は意識を集中し、鏡へ念じる。

——デカくなれ！

途端、八咫鏡は直径1mにもなる巨大な盾となった。

糸が当たるも、全く無意味。

何故か張り付きもせず、溶けるように消えていく。

糸が途切れたところで八咫鏡を小さくし、ジャンプで飛び乗る。

そこから飛び出し、即座に出した天叢雲剣で切り裂いた。

切り裂く瞬間、刃の大きさが2m以上となり、蜘蛛は一刀両断となる。

消えていく蜘蛛を見ながら、真は元の大きさに戻った天叢雲剣に寄

りかかる。

全身に倦怠感。フルマラソンをダッシュしたかのような息切れ。

「シン、今の何?…ってシン!大丈夫!?’」

裕奈の言葉に首を横に振る。

「……疲れた」

ちょっと寝ていく、と地面に大の字になる。全く燃費が悪すぎる。しかし、ぺちんと額を叩かれた。

「女の子がこんなところで寝ないの。…それに1人で帰るのは心細いしにゃー。」

手を差し出しながら弱々しく笑う裕奈を見て、すまないな、とその手を取って起き上がる。

が、すぐにフラ…と倒れそうになり、結局裕奈の肩を借りて歩くことになった。

それ以降妖怪(?)に会うこともなく、女子寮に辿り着いた。

裕奈に礼と、明日説明することを言って別れ、真は直接木乃香達の部屋に向かった。

ノックをして部屋に入ると、すぐにアスナがやってきて、

「遅いぞー!」

と言った。

スマナイ、と返してから、自分の背中に泥が着いていることを思い出す。

「…少し待っていてくれ。」

くると背を向けて部屋から出ようとするが、アスナにがっかりと襟をつかまれた。

「シャワーと着替えくらいなら私達の貸すわよ。」

お前はエスパーか、と思いつつ、アスナから逃げようとするが、1人では歩くのが精一杯の真になにかできようはずもなく。真はズルズルと引きずられて行った。

「木乃香ー、ちょっとシンのことシャワーに入れてくるからー。」

台所から、わかったえー、と声が聞こえてきた。真はもうどうにでもなれ、となすがまま脱衣所に。

しかし。

「何故お前がいる。」

「流してあげるわ。」

余計なお世話だ！と叫びたいのを我慢してアスナを脱衣所から出そうとするが、またしても押し切られる。

そしていつの間にか服を脱いでいたアスナに剥かれる。

目を瞑ったため、抵抗という抵抗ができなかった。

「あんた肌冷たいわねー…ってこの胸の傷なに!？」

アスナの驚く声に反応して見てみれば、胸の下あたりに刺し貫いたかのような傷痕。

——ゲイ・ボルグにでもやられたのかよ…

真の素直な感想である。

正直、自分の物であっても直視しづらい。

「見たくないだろ。」

だから入らないで欲しい、という意味を込めて言ったのだが、アスナは「大丈夫よ、ちょっとびっくりしただけ」と言って風呂に入ってきた。

半ばヤケクソになった真は、アスナに背中を洗ってもらっていた。

「うひゃうっ！」

ツツツー、と背中を撫でられ、大きく背を逸らす。

驚いて振り向けば、にやにやと笑うアスナが、指をわきわきと動かしていた。

背筋に寒気がはしり、逃げようとするがここは狭い風呂場。腰を浮かせただけで捕まってしまった。

※ここからは音声だけでお楽しみください。

「神楽坂…やめ…ひゃっ！」

「アスナでいいわよ、ほれほれ。」

「やめ、あ、はあん！」

「お、ここかな？ここだな？」

「や、ひ、あひ、あはははは！」

「こっちはくすぐったいところか。しかしシン、細いわねえ…」

「いや、もう、らめ…ひいん！」

……。

……。

…。

パタン、と脱衣所の扉が開いた。

木乃香がそちらを見ると、バスタオルを巻いただけのぐったりとした真を抱えたアスナがいた。アスナは普通にジャージを着ている。真の顔は紅潮していた。

「あはは、ちょっとやり過ぎちゃったみたい。」

てへ、と照れ笑いをするアスナ。

ちょっとじゃねえ。

その後漸く身体が動くようになった真に服を着せ、木乃香が出来上がる時間を計算して、ちょうどよいタイミングで夕飯を食べ始めた。メニューは、米、味噌汁、焼き鮭、玉子焼き、漬け物である。シンプルだが、それ故に腕が出る。

「「いただきます」」

まず、味噌汁。

一口口に含んでから飲む。

「………美味い」

素直な感想。

木乃香が少し誇らしげな顔をする。

その後も夢中になって食べる真。

全部のメニューがプロが作ったもの並に美味かったという。

しばらくして。

「……御馳走様。」

多めに作ってあった夕飯は全て無くなった。

アスナも含めた3人で食器を洗う。

学校についての話等をしながら仕事を終わると、既に10時を回っていた。

少し急ぎながら自分の部屋に向かう——途中で、最初にこつちを警戒していた生徒、龍宮真名と鉢合わせした。

「さっきの戦い、見せて貰ったよ。」

見られたか…！

これで麻帆良には居られなくなったか…？

「安心していい。まだ学園長には報告していないからね。」

警戒する真に対し真名は飄々と言ったのける。

怪訝そうに真名を見る真に小さく笑いかけてから、こう言った。

「初めて見た時から気になっていたんだけどね。照天真、お前はなんだ？」

——何を言っているんだ…？

真の中で疑問が膨れ上がる。

自分は人間だ…恐らく。

スペックは高すぎるし、これ宝具だろう、というものもあるが。思考回路が渋滞を起こし、未だ何も言わない真に、真名は言葉を続けた。

「さっき見せて貰ったあの盾と剣。あれに込められている魔力は普通じゃない。まだ使いこなせていないみたいだが、あれはかなり強力な代物だ。アーティファクトでもないんだろう。」

魔法など存在していることしか知らない真には、アーティファクト、という用語は聞いたことがなかったが、恐らく違うのだろう。

「だから、お前の正体が知りたい。」

真としては適当にでっち上げるしかない。

自分でも把握出来ないのだから。

しかし、だ。どうせ相手の気になっていること。
売れるならば売る。

「情報料は？」

ちゃっかりしてるな、と苦笑しつつ、少し考える真名。

顎に手を当てる様子は中学生とは思えない色気を醸し出している。

「む？今なにか失礼なことを考えなかったか？」

慌ててかぶりを振りつつ、老けて……もとい、大人っぽいことを気にしているという女の子らしい一面に小さく苦笑をもらす。

「さて、情報料、ね。普通に学園に報告しないことじゃ駄目なのかい？」

「それは絶対状況だ…他。」

ふむ、と再び黙考する真名。

お互いになにも喋らず、時々相手を窺う。

寮の廊下で美少女ふたりが黙り込んだまま時間がすぎる、というのは中々にシュールな絵である。

しばらくしてから口を開いたのは真だった。

「龍宮はどういう戦闘をする？」

「私に苦手な距離はない、が。飛び道具全般に通じている。」
ふむ、と小さく呟いた真は顔を上げるとこう言った。

「小石位のサイズの物を使う武器はあるか？」

なんでそんなことを？とでも言うように首を傾げた真名だが、そのまま縦に首を振った。

「羅漢銭、という技術になる。」

へえ、と普段の真らしくもないテンションで何度か頷く。

「それを教えてくれ」

八尺瓊勾玉のいい使い方になる、ということ嬉しくなっていたのだが、そんなことを全くしらない真名は不審に思った。

しかし、そこは凄腕の傭兵。

なにか考えがあると推察し、その位ならいい、と鷹揚に頷く。

よし、と小さくガッツポーズをする真を見て、最初のイメージとのギャップに苦笑いをこぼす真名。

「それじゃあ、説明してもらおうよ」

「…そうだな。俺は劣化版の英霊とでも言うべき存在になる。」

英霊。

その言葉に真名は瞠目する。

英霊とは、生前偉大な功績を上げた英雄が死後信仰の対象となったものだ。

しかし真は信仰された覚えはない。これは、この身体を持ち主のものか、と考えている。

基本的に生前は英雄だった者達であるが、中には本人にしてみれば普通に一生を終えたつもりでも周囲の人間がその生き様を神格化し、英霊となった者も居る。

もしや自分もそうだったのでは、と考えたこともあるが、まあまずないだろう、と思っている真である。

英霊の中身は人々の理想によって編まれている。また、その世界における知名度がある程度能力を左右する。

宝具という必殺の武器を持つが故に格上の精霊すら打倒しうる。真の持つ三種の神器はこれに近いものだろう。

死亡した時点で「完成」している為それ以上の成長は有り得ない。

勿論真は自分が成長しないとは思っていない。これも、劣化版と称した理由になる。

ちなみに、真はこの知識を“向こう”で知ったために、自らの立場に当てはめた。

しばらくの間絶句してから、真名は努めて冷静な、しかし少し掠れた声を出す。

「…真の、真名は？」

その言葉に真は小さく笑う。

「シンでいい（発音が違います）。真名は照天真。あくまで擬似的な、劣化版の英霊だ。気負う程の存在じゃない。」

何が違うのか、と聞きたくなったが、これ以上はまた情報料を取られるだろう。

またの機会にだな。と考えた真名は、

「じゃあ、シン。また今度だ。」

妖艶な笑みを浮かべると、優雅に去っていった。

そこに先程までの気負いはない。

——流石だな。

誰にも聞かれない賛辞を呟くと、自分の部屋へと向かい、布団に入り、疲れを癒すために石のように眠った。

真名の笑みは心臓に悪い、と未だに紅潮の収まらない頬を意識しないように。

05 戦闘之後（後書き）

はい、F a t e ネタいただきました。

三人称は難しいな・・・

流れ星を見つけたら文才が欲しい、と三回となえます。

06 四面楚歌（前書き）

現在、ネギと恋愛をさせるか、タカミチと恋愛をさせるか、3—A
のどれかといちやつさせるか考え中です。
どうしたらいいですかね・・・

06 四面楚歌

その日は朝から雨だった。

真は窓に当たる雨粒の音で目を覚ました。

ふわあゝあ、と大きく伸びをしてから顔を洗う。ここまではいつも通りだ。

しかし、鏡に映った顔を見ると、違和感を感じる。

当然だろう。その顔は今までとは違うのだから。

まだ“こちら”に来て3日目だ。

新しい自分には、まだ慣れない。

手軽に朝食を済ませ、学校に向かう。

かなり早い時間の為、クラスメイトと会うことはまずない。
登校2日目だが、大方の登校時間の予想はついているのだ。

案の定誰にも会わず教室に辿り着いた。
教室にも誰もいない。

そのまま自分の席に向かい、机に突っ伏す。

そのまま、いい加減能力の燃費をどうにかして、あとは剣の巨大化の原因も調べないといけないな、と今後の課題について考えを走らせていく。

ふと、扉を開く音が聞こえた。

眠たげな顔でのろのろと顔を上げた真は、そこに居たクラスメート、長谷川千雨を確認して小さく頭を下げる。

それに対し、千雨はふいと目を逸らすと自分の席に向かってしまった。

なんだ？、と疑問に思いながらも顔には出さず、真は元のように机に突っ伏した。

一方、千雨は苛立っていた。

何故あの容姿で日本人なのかということに、さらにそれをなんの疑問もなく受け入れるクラスメート達にも。

しかも初日から寝るし。

別に麻帆良では大したことではないが、やはり見ていると苛立つ。椅子の座り方も男のようながに股気味で、本当に女なのか疑いたくなる程。

さらには『事情』とやらのこと。

自分の誕生日すら知らないなど、孤児でもあまりいないだろう。

思い返し、やっぱり変な奴だ、と再認識した千雨であった。

しばらくして、教室にも生徒が増えてきた。

真は教室内の喧騒に目を覚ます。

頭をふるふると――本人としてはぶるぶると――振って意識をはっきりさせると、こちらを見ている裕奈に気付いた。

昨日のことだと判断し、説明は放課後に、と音を出さずに言うと、伝わってか伝わらずか、こちらから視線を逸らす。

が、すぐに何かを考えるような顔をしたかと思うと、運動部4人組の3人になにかを言い、こちらに歩いてきた。

やっぱり聞こえていなかったのか、と今度は口に出して言おうかと思いい口を開きかける。

「あ、あのッ！」

しかし、その声は裕奈の言葉によって遮られてしまった。

それなりに大きな声が出ていた為か、教室内の注目が集まる。すぐにその様子に気付いた裕奈は、顔を赤く染めた。

「あ、や、やっぱりいい……」

尻すぼみに小さくなっていく声を聞き、真は小さく頷くと、再び机に突っ伏す。

席に戻った裕奈に怒涛の勢いで質問を始めたクラスメート達。

無愛想な転入生に何かありそうな様子で声をかけたため、気になったのだろう。

一方で真はといえば、狼狽える裕奈を顔をあげてちらりと見た後、本格的に眠りはじめた。

そちらを恨みがましくにらみつけ、裕奈は質問を誤魔化しにかかるのだった。

放課後。

今日もタカミチからみごとなチョーク投擲を頂いた真は、こぶのできた額を気にしながら屋上の前の階段に来ていた。

雨が降っているので、外には出ない。

裕奈に昨日の蜘蛛について説明するためである。

——しかし、どう説明したものか。

相変わらずの仏頂面だが、内心ではかなり悩んでいるのである。

と、そこで階段に足音が響いた。

裕奈が上がってくるのを確認し、もたれかかっていた壁から身を起こすと、裕奈の正面に立つ。

周囲に誰もいないことを確認すると、口を開きかけた。

「す「あのさ、」……………」

しかし、またしても出鼻を挫かれる。

少しムツとした顔になりながらも、真は話の続きを待つ。

「あ…あのさ、その、ありがとう。」

少し照れくさそうに言う裕奈を、真は目を丸くして見ていた。
突然礼を言われて驚いたのだ。それも危険な目に合わせてしまった人間に。

「いや、あの、さ？助けて貰ったからさ…。」

やば、可愛い、と口の中でもごもごと呟き、真は顔を赤く染める。

「…と、とりあえず説明する。」

無言で頷く裕奈に、真は大方のことを説明した。

この世界に魔法があること、昨日の蜘蛛はその一種、関西の式神の類であるということ、麻帆良が魔法使いの拠点であること、自分が持っている異能のこと。

ここまで話すと一度言葉を区切り、こう続けた。

「俺は魔法を知らないことになっている。だから明石は魔法のことを誰にも話さずにいてくれ」

この先ずっとだ、と付け加えると、俯いていた顔を上げて裕奈を見る。最悪の場合は脅しくらいはしなくてはならない。

しかし予想に反して、裕奈はしばらくきょとん、とした顔を見ると、すぐに小さく笑う。

それから、

「ふふふ、当たり前だにゃー！」

と言って絡み付いてきた。

何も聞かないでいてくれることが無性に嬉しい。

真は珍しく仏頂面をくずし、ふふ、と笑ったのだった。

その後、ひとしきりじゃれあった2人はバスケット部に行き、部員へと挨拶すると部活を始めた。

最初は体力を作るためのトレーニングである。ずっと走っているうちに、体力も上昇していることが分かる。

つくづく便利な体だ、と呆れる真だったが、こういうのも悪くないな、と考えていた。

次に、パスやドリブルの練習である。彼らはまだ中学一年生であり、簡単なものだった。

その後は各自の自主練習や休憩をはさみながらの応用練習など。

真は体の動かし方を大きく変えるため、基礎的な動きを繰り返し繰り返し行う。

元々センスはいいほうであるため、じきに体も慣れた。

周りにも目をやる余裕が出来てきた真は、裕奈の技術が他と一線を画していることに気付いた。

中学一年生にしてのその技術に舌を巻く。

ネギま！に関してだけの記憶がない真は、流石原作キャラ、というようには片づけられない。

世界樹もそうだが、この麻帆良はなにかおかしい、と思い始めた真

だった。

部活後、裕奈と一緒に寮に向かう真は、昨日と同じような状況だな、
と思い人通りの多い道を選んで歩く。

自分の異能のことを知っている相手には会話を気にする必要がない
ため、大分素直になった。

部屋に入り、すぐに風呂に向かう。

汗をかいた体を流し、バスタオルを腰に巻いた格好で部屋のまん中
に胡座をかく。

そのまま意識を集中させ、天叢雲剣を出す。

よく見れば、不思議な剣だった。

横に広がる小さな鰐の付いた両刃の剣。

細身の刃は蒼黒く輝き、柄は両手持ちで、むき出しの金属が光沢を
放つ。

命を奪うもの特有の無骨さがありながらも、はっとする程に美しい。
レイビテ細剣というには太く、片手剣にしては長い。

両手剣にしては短く細く。

観察を終えると、部屋を傷つけないように切れ味を調べてから、真
はサイズの変更が出来るか確認を始める。

今までの二度の使用の際には、刃が2m以上に巨大化した。

それも、無意識に、だ。

意識すればサイズを抑えられるかの確認である。
壁から2 m以上離れ、1 mくらいの刃を意識して念じる。

——デカくなれ！

結果からいえば、大きくはなった。伸びるのではなく、いつの間にか大きくなっているのだ。

だが、刃のサイズは2 m以上で固定らしい。
重さは変わらない。

切れ味は何故か上がっていた。恐らく、チタンでもバターの如く切り裂けるかもしれない。

しかし、大きくして2分程して、真は疲れから剣を消した。

——あまりにも燃費が悪すぎる。

朦朧とする頭を抑えながら真はひとりごちた。

全身からびっしりと汗をかいている。

のろのろとバスタオルで汗を拭き取りながら、もう一度風呂に入らなくちゃだな、と思う。

立つのも億劫な足を無理やり動かして脱衣所に行き、バスタオルを取って風呂の扉を開いた。

ここで、真が何故帰ってすぐに風呂に向かったかを説明しよう。

ここは女子寮である。

真の精神はほぼ男だ。

よって真は女子と一緒に風呂に入るのを避けたのである。

部活から帰った時刻は凡そ6時。風呂から出たのが6時20分。色々調べるうちに時間がたち、さらに疲れにやられた体をしばらく休めて今は8時30分。

大体女子が風呂に入る時間である。

何がいいたいかと言えば。

風呂場にはクラスメート達が居たのである。全裸で。

咄嗟に踵を返して逃げようとするが、捕まってしまう。

胸の傷を見ても誰も何も言わずにいてくれたのは嬉しかったものの、それとこれとは話が別。

みんなに『身体を洗う』と称して身体を弄られ擦られ、敏感な真は身体の疲れも手伝ってすぐに抵抗を諦めた。

「しかし、細いよねーシンちゃん。」

一旦落ち着き、湯船に浸かって和美が言った言葉に対し、シンちゃんはやめれ、と返したいのだが、口を開くのも一苦勞であるために断念する。

「髪の毛白いのにさらっさらだしねー。」

これはまき絵。

「肌も綺麗。」

アキラ。

そんなことを誉められても自分は男だと思っている真は嬉しくないのだが。

湯船の淵に頭を乗せてぐったりとしながらクラスメート達を見る。裕奈が同情的な視線を送ってくるのだが、それなら助けろと口を大にしたい。

「やばい…」

真はふと気付いたことに愕然と呟いた。

それを耳ざとく聞きつけた楓がにやにやしながら聞く。

「何がやばいのでござるか？」

底知れない恐怖を覚えた真は慌てて小さく首を振る。

だが誰かに助けて貰わなければならないことだ。

周囲を見渡すも、誰もがにやにやとした顔でこちらを見ている。

真は、クソ、とでもいいかげん顔で絶対に言いたくない言葉を言ってしまった。

「身体が……動かねえ。」

途端にきらーん！と光るクラスメート達の目。

真は顔を青くして震えることしかできない。

真のその日最後の記憶は、視界一杯に広がったクラスメート達のにやけ顔だった。

夜闇に、悲鳴が響く――――

06 四面楚歌（後書き）

前書きにもかいたように、今後の真の恋愛をどうするかは完全に未定です。

感想として書いてくれると嬉しいです。ハイ。

07 真之一日（前書き）

今回は駄作です。

あんまり本編に関係ないから読まなくてもいいかも。

07 真之一日

——お前が■■■か……

——せめて娘だけは…娘だけは！

——やめろ…！

——殺してやる…

——痛い…痛いよ！

——絶対…殺してやる…！！

ガバツ！

「ハア……ハア……な、何だ…今の…」

布団を跳ね飛ばして起き上がった真は、暫く小さくなって震えていた。

落ち着いてくると、自分が全身にびっしりと汗をかいていることに気付く。

取り敢えずシャワーを浴びようと思い、着替えを取り出した。服を脱ぎながら思い出す。

今日は“こちら”に来てから一週間目だ。

4日間、大したこともなく過ごしたのだが：今日の夢は皆目見当がつかない。

ただの夢にしてはリアルすぎるのだが。

夢の内容を思い出し、小さく震えてから、吹っ切るように蛇口を大きくひねる。

「うわっ！」

冷水が飛び出したことに驚き、小さく跳ねると、真は1人苦笑しながら、湯が出るのを待った。

真の朝は早い。

……平日は。

今日は日曜日であり、真が目を覚ましたのは8…30。

今日は予定もないので部活の自主練でもするか、とジャージ（勿論男物）に着替えて部屋を出た。

寮を出てしばらく歩いていると、前方に見たくない顔が見える。

咄嗟に物陰に隠れようとするが、相手は目ざとく此方を見つけると、

ニカツと笑い、歩いてきた。

観念して相手に向かう真の顔には、『鬱陶しい』とぼつちり書かれているように見える。

「やあやあやあ！これはこれは、マイハニーじゃあないか！こんなところで会うなんて、奇遇だねえ！」

「…何か用か？」

うんざりしたように返す真。

このキザ…というかバカな男は瑠璃崎玉子。るりさき たまし

本人は瑠璃崎王子だ！と言い張るのだが、周りはたまご、と呼ぶ。

「なあに！偶然出会った僕らの愛を確かめ合うのさ！」

なんだか真に一目惚れしたとかでここ数日付きまとって来る。

会うのは本当に偶然なのだろうが、俺は本当に神に見放されてるんじゃないか？と真は真剣に悩んでいる。

「…早くどっか行け。」

「いやあ！照れてる君も可愛いよ！」

真の顔は明らかに拒絶のそれなのだが、この幸せな男には関係ないらしい。

黙っていれば顔はいいのだが、言動が残念すぎる。

「やっぱり今日はついて「用事があるから失せろ」…まったく、照れなくたっていいじゃないか！ま、用事があるなら今日の愛の語ら

いはここまでにしよう！じゃーねー！」

最後にニカッ、と笑うと玉子は去っていった。

明日以降もねえよ、と呟いた真は、気を取り直して歩き出す。

体育館に着いた真は、部員から預かっていた鍵を弄びながら部室に向かった。

ジャージから運動着に着替えると、ウォーミングアップをしてからドリブルの練習を始める。

“向こう”での、流れるようなドリブルではなく、この小柄な体のどこにそんな力があるんだ、といったくなるような怪力を以てのパワーでのごり押し。

小柄な体とは思えない力強いドリブルで相手の手を避ける。

ダンクも可能な程のジャンプ力だが、普段はレイアップが基本だ。

今はまだ違和感の残るこの体に動きが慣れるまでは基礎的な練習だ。

……慣れたら慣れたで問題かもな、と真はひとりごちる。

自分が自分でなくなることへの恐怖。

赤の他人の体への忌避。

普段は押し隠していても、心の内では冷静ではいられないのだ。

気付かずうちに突っ立ったままになっていた真は、ふるふると頭を振ると、今日はもう引き上げよう、とボールを回収しに行った。

疲れによるものだけではない汗をシャワーで流す。

なんだか今日は妙なことを考えるな…

真は首を傾げた。

「まあ、いいか。」

取り敢えず納得させると、さっさとシャワー室から出る。

今日の午後は、マナとの訓練だ。

超包子で昼飯を取る。

クラスメート4人に軽く挨拶をしておこう、と以前やってきたのだが、はまった。

1日おきには来ようと思っている。

何故か2回目以降から客が増えていたが。

：飯を食っている時に浮かべる自然な笑顔が、本人の預かり知らないところで人気になっているのである。

さて、昼飯を食べた後、真は真名に教えてもらった学園長の千里眼が届かない場所に向かう。

「ああ、来たかいシン。じゃあ始めようか。」

コクリ、と無言で頷く真に、真名が500円玉を何枚か渡す。

真が作られ……もとい、真が作った的に向けてひたすらに500円を弾く訓練だ。

勾玉でやった方が形に慣れてやりやすいのだが、いささか威力の上乗せがあるのが痛い。

「違う。もっと全身の力は抜くんだ。」

「…む、こうか？」

「まあそんな感じだね。」

ふむ…と頷いてからもう少し工夫を凝らしてみると、先程よりも上手く行った。

「シンは筋がいいな。」

繰り返し頷きながら真名が言う。

少し嬉しくなった真の微笑みに、真名が見とれたのはまあ、言うまでもないだろう。

さてさてさて、訓練も終わらせ、6時になった。

真は取り敢えず寮内のある部屋に向かう。

「あ、来たわよ木乃香ー。いらっしゃいシン。」

「…いつもすまない。」

木乃香とアスナの部屋である。

真が夕食は定期的にここで取ることにしているのには理由があった。

「まあ真に料理をさせると、ね。」

全く料理が出来ないのである。

部屋の中の電子レンジをお釈迦にしたのも記憶に新しい。

まあそんなわけで、定期的に夕食をいただきに来ているのである。

とまあ、これが真の休日になる。

この後は、適当に風呂に入ってから眠りに就くだけだ。

07 真之一日（後書き）

最初のは一応伏線ってことになっています。ハイ。

08 超展開乙（前書き）

短
い
っ
す。
は
い。

08 超展開乙

6月某日。

真は麻帆良学園を出ることになった。

別に事件があった、とか、能力がばれた、とかではない。

簡単に言えば、学園長がなんとなく出しておいた里親募集の里親が決まったらしいのだ。

学園長自身も誤算だったようで、「まさか記憶が一切ない子を引き取るとはのう」と呟いていた。
後悔するならすんなや。

当然真も初めて聞くことであり、能力を隠すための警戒を減らせることに喜びはしたが、裕奈をはじめとしたクラスメート達と別れることは渋った。

「なんとか麻帆良内で探せないのか。」

真はそう学園長に申し出たが、すまなそうに断られてしまった。

決定事項を覆せる程真は権力者ではないし、断ろうにも学園長がなにやら勘違いで首を縦に振ってしまったらしいので手遅れである。
もげろや学園長。

そして引っ越し当日、麻帆良女子中学校、1―Aにて、最後のホー

ム
ル
ー
ム。

誰にも引越すことは話していない。
 というか話を聞いたのが昨日の放課後だったため、話している暇がなかった。

急すぎだよ。

教室の前でタカミチが話す。

「えーっと、真君から話があるそうだから、ちょっと出てきてくれるかい？」

おい、俺に話せと？という視線を浴びせかける真に苦笑いを向けると、教卓から降りるタカミチ。

そちらを再び恨みがましく睨みつけてから、真は教卓の脇に立つ。

「……引越すことになった。」

真はぼそりと要件だけを言うと、驚愕に固まるクラスメート達を心なしか寂しそうな目で見ていた。

再起動は全員が同時。

「な……」

クラス中の声が揃った。

「なんでさー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！！」

……どうやら全員が正義の味方らしい。

直後、次々に投げかけられる質問に、真は鳩がクラスター爆弾を喰らったような顔をしたままフリーズしていた。

…まあ、筆舌に尽くしがたい顔だと考えてほしい。

「はいはい、ちょっとストップ。」

狼狽える真を見かねたようにタカミチが助け舟を入れた。今度は、転じて助かった、という視線を向ける真。

「えっと、どうしてなの…？」

一度落ち着いてから、泣きそうな顔で聞いてくる裕奈に、いつもの仏頂面を少し寂しげにした真が答えた。

「……里親が見つかった。」

それを聞いて、全員が複雑な顔をした。

クラスメートの里親が見つかったことに対する嬉しさと、クラスメートがいなくなる寂しさ。

真はクラスメートのその顔を見て、不覚にも泣きそうになった。

泣かなかったが。

その後。

引越しの準備が出来て、いざ出発、という時である。

「ちょっと待ってーーーー!!!!」

そんな声と共に、裕奈がやってきた。

しばらくの間、驚く真の前で息を整える。

それから、要件を切り出した。

「…もう、会えないの？」

不安げに聞いてくる裕奈に、真は一つのことを決めた。

「…里親に掛け合ってみる。」

どんなことをしても麻帆良に戻って来ようと。

裕奈の顔が少しだけ明るくなったのを見ると、真は小さく笑みを浮かべると、

「じゃあ、また。」

はっきりと、そう言った。

こうして、真は麻帆良から出て行ったのである。

08 超展開乙（後書き）

文体がいつもと違うことに気づいたが・・・放置だぜ！

09 帰郷（前書き）

サブタイトの形をここから変えていきます。

別に漢字二文字とかじゃありません。

09 帰郷

18ヶ月。

これだけの期間がかかった。

何に、と聞かれれば無論、真が麻帆良に再び来るまで、である。

もう中学二年生も終わりに近づく頃、真の願いは遂に叶った。

勿論意地悪をされて今まで来られなかった訳ではない。

義母と義父はとてよくしてくれたし、新たな友人もいい人ばかりだ。

養子縁組はせず、名字を変えることはなかった。

真が“向こう”での自分の存在を証明するモノとして残すことを望んだのだ。

麻帆良のように監視もなかったため、18ヶ月間、なんとか誰にもばれずに修行を続けることが出来た。

今では勾玉の複数同時操作も可能だ。

必然的に真名に教わった羅漢銭を使用する機会は減ってしまったが、牽制や不意打ちには有効である。

天叢雲剣のサイズの任意変更はやはり無理だが…真の戦闘スタイルには剣はあまり向かない。

この18ヶ月、ほぼ毎日を格闘訓練に費やしたといってもいい。

“向こう”で少しやっていた格闘技の技を磨いただけなのだが、ま

あそれなりには上達しただろう、と真は考えている。

「おい真、準備できたかー？」

そこで、一階から義父の声がかかる。

真は無言で片付いた部屋を見渡すと、階段に向かった。

「じゃあ真、身体には気を付けてね？」

「何かあったらすぐに連絡するんだぞ？」

駅、改札前。

義父母の心配する声に無言で頷くと、真は2人の顔を見た。

「……………行ってきます。敏夫さん、雅子さん。」

そのまま、背を向けて改札の中へと消えていった。

残された2人はそっと目尻を拭うと、小さく何かを呟いて、肩を並べて歩き出した。

それから5分後、電車に乗った真は。

麻帆良へ行けることの嬉しさと、18ヶ月間世話になった義父母と別れる寂しさを覚えていた。

複雑な表情をして俯く。

――休みには必ず向こうに行こう。

しばらく悩んでからそう結論づけると、どこか吹っ切れたような表情で麻帆良に到着するのを待った。

『麻帆良、麻帆良。』

無機質なアナウンスと共に扉が開く。
真は電車を出ると、大きく伸びをした。

近頃成長を始めた、まな板＋α程度の胸が張られ、周囲の目が向けられる。

真の見た目はかなりいいのだ。

さて、と誰にも聞かれないような小さな声で呟くと、待ち合わせの場所へ向かって歩き出した。

やはりと言うべきか、待ち合わせ場所に来たのはタカミチであった。ちなみに真は麻帆良にいた頃、タカミチが真の“向こう”での性別を知っているのではないか、と思い込み、そのことで少々騒ぎがあった。

それについては、またいつか語るとしよう。

さて、そんなわけで誤解もとけた真としては、些か気まずいものが残っていたのだ。

勿論今回は多少動揺していたために、それは無愛想な真ともいえど態度に出る程度のものであった。

「……どうも。」

最も、無愛想さに拍車がかかる、という方向のものであったのだが。

タカミチは一瞬驚いたような表情を見せたが、すぐにいつもの優しい微笑みを見せると、こちらは何時もの人の良さげな声を出した。

「やあ、久しぶりだね真くん。元気にしてたかい？」

「……はい。」

相変わらずの無愛想さで返事をしながら、真は内心少々驚愕していた。

——何故この男はここまで大人なんだ。

酷い言葉も浴びせたというのに、それを微塵も感じさせない言動に、真は若干の尊敬を含めた目で見ていた。

一方のタカミチはといえば、こちらはこちらで中々に驚きがあった。

まず一点、服装である。

あれだけ女物を着たがらなかった真だが、現在の服装には女物も含まれている。

黒の帽子に黒い半袖Tシャツと七分丈の迷彩ズボン、というぱっと見は男のような服装だが、Tシャツは控えめながらも可愛らしさを醸し出したものだ。

帽子は横に飾りボタンのついたもので、こちらも女物。

次に表情。

相変わらずの仏頂面ではあったが、たった今見せた驚愕（自覚なし）や尊敬など、かなり可愛らしいものであった。

タカミチは今日は部屋への案内だけとはいえ驚かされてばかりだと密かに嘆息した。

こうして部屋に通され、タカミチと別れた真は、荷物を纏める暇もなく強襲した裕奈に捕まっていた。

「ちょっと！なんで手紙出すのがあんなに遅かったの！？」

第一声がこれだ。

真は余りの嬉しさから手紙を出すのを忘れていたのだ。麻帆良に帰ってきた一番の目的ともいえる親友に伝えるのを忘れるとは、本末転倒もいいところである。

「…すまん。」

真が謝ると、裕奈は途端にニカツと笑った。

「そうそう、それにゃー。謝るのが大事だからにゃ。」

どうやら謝らせたかっただけのようだ。

真はほんの少しだけ口の端を吊り上げると、今までどうだったかについて訪ねた。

それから、これまでの生活や勉強について——これについては互いに口を閉ざした——など、他愛のない話をして過ごした。

裕奈が部屋をでた後の、真。

「本当に、また来るとはな…。」

誰もいなければ、多少饒舌になる真だった。

ベッドに寝ころび、普段は絶対に見られない微笑みを浮かべている。

男が見れば顔を赤くすること請け合いだが、生憎と真にはいい加減女としての精神が生まれ始めているために、風呂や着替えの際に目を瞑る、ということとはなくなったのである。

そのまま、真の意識は眠りの世界へと潜りこんでいった。

明日は、久し振りの麻帆良女子中学校である。

09 帰郷（後書き）

裕奈とのからみが短いですね・・・

10 嵐の前の静けさ（前書き）

実質サブタイの統一はここからになる……かも。

10 嵐の前の静けさ

翌日。

の、朝。

学校にて。

「今日は転校生を紹介しよう。」

タカミチの声が聞こえてくる教室の前で、真は若干緊張していた。

最初にここに来たとき、クラスの連中にもみくちゃんにされた記憶があるためである。

ちなみに今の服装は制服の下に短パンを履いた御坂スタイルに、学生靴ともう一つ、サブバッグのような靴を持っている。

決して自分でスカートを履いた訳ではなく、タカミチにやりこめられてしまったのだ。

……………電話で。

「じゃ、入ってきて。」

タカミチの声に恐る恐る扉を開けて中へ踏み込む。

全員の目がこちらへ向けられ――

「え……………?」

――驚愕へと変わった。

真はそのまま教卓の脇に立ち、挨拶を始める。

「…照天真だ。久し振りになる。」

クラスメート達はフリーズが治ると、すぐに叫んだ。

「久し振りーーーーー!!!!!!」

真は「やっぱりか：」と誰にも聞かれないように呟きながらタカミチの後ろへと隠れた。

煙草の匂いが鼻をくすぐる。

タカミチは驚いたように目を見開いた後、微笑を浮かべた。そして真へと飛びかかってくる女子生徒達を諫め始める。

「真くんも怖がつてるし、ストップだよみんな。」

驚くことに、タカミチの一言で全員が渋りながらも退いたのである。どうやらタカミチのチョークの威力を思い出したらしい。

真も同じく、小さく肩を震わせた。

放課後。

お帰りなさいパーティに連行され、みんなと楽しんだ後の話である。真は真名と修行をした場所へ来ていた。

勿論、真名と話をする為である。

「やあ真。久し振りだな。」

「……久しぶり。」

「羅漢錢の訓練はちゃんとやっていたかい？」

真名の質問に、真はほんの少し済まなそうに表情を変えた。

「…訓練はやったが実戦ではあまり使わない。」

この文、真が一度に喋る量としては大変多いものだ。

真名はふむ、と頷くと、

「まあ、自分が安全なのが一番だ。やりやすいようにやればいい。」

と答えた。

眞は表情をパツと明るくすると「ありがとう」と言つて微笑む。普段無表情な眞がそれをする、やはり誰もが見とれてしまう。

真名も一瞬呆ける程の威力だ。

真はそのまま気恥ずかしげに頬をかくと、すぐに無表情に戻ってから別れを告げて踵を返した。

場所を離れ、その足で体育館へと向かう。

バスケット部へと顔を出すつもりだ。

つたのだが。

「久し振りじゃないかハニー！ イイイイイイ！ ！」

「……………誰だ？」

どこかで見た覚えのある男が飛びかかって来た。

真はどこかで会ったことがあったか、と記憶を探ったのだが、分らなかった。

「君だけの為の瑠璃崎王子さ！ いやあ、しかし冷たい君もキュートだ！ 僕の為に麻帆良に帰ってきてくれるなんて！ まさに運・命！」

そのうざさに真はようやく得心がいった、と頷いた。

「…玉子か。」

「玉子じゃあないよ王子だよ！」

どうやらそれだけは聞き捨てならないようで、目をくわっと見開いて真の言葉を否定した。

真は仏頂面のまま適当に頷くと、口を開いた。

「…少し用事がある。」

だからもう行くぞ、という意味を込めて言った言葉に、玉子は図々しい提案をしてきた。

「じゃあその場所までご一緒するよ！」

真は女子中エリアだから、と断ろうとしたのだが、玉子の傍若無人ぶりを思い出し、仕方なく好きにさせることにした。

はあ…と溜め息を吐いて歩き出す真に嬉々としてついて行く玉子。
しかし真は鬱陶しげな表情に反し、足取りはどこか楽しそうではあった。

ここからは、一部会話抜粋にて。

「一年半もなにをしていたんだい？」

「…里親と暮らしていた。」

「楽しかったかい？」

「…それなりには。」

「ところでハニー！僕のことは今から王子と呼んでほしいな！」

「…遠慮しとく。」

「あ、あははは」

「玉子で十分だろ。」

「まあそれでも君からの愛があればいいのさ！」

「…もう少し誠実にしろ。」

「そうすれば愛が増えるのかい！？」

「…友人愛だが。」

「最初はそれで十分さ！」

ここで体育館の前へと到着した。

知り合いに見られたら面倒になる、と真はすぐに玉子を追い返した。

「あ！真〜〜！よく来たにゃ〜！」

そこで体育館から顔を出した裕奈から声がかかった。

次々に部員も顔を出す。

結局、今朝と同じようになってしまった。

暫く後。

「じゃ、練習始めますか！」

キャプテンになっていた裕奈が号令をかけ、部活を始めるのであった。

「改善されてないじゃ〜ん。」

やはりというか、今まで身を守るための修行ばかりだったため、身体能力は高いのだが技術がついていない。

裕奈に呆れ顔で指摘され、真はしゅんとしたように俯いてしまった。真には些か不本意だが、その仕草はどうにも愛らしくなってしまう、部員達から裕奈へとジト目が向けられる。

「う……………」

居心地悪そうにする裕奈に、真は「悪かった」と言って練習を再開した。

それを見て、裕奈と部員達も一度顔を見合わせて笑うと、練習を始めたのだった。

夕方。

明日奈と木乃香の部屋。

木乃香がまもなく料理を始めようというとき。

コンコン。

扉が鳴った。

「はいはい！」

明日奈が扉を開けると、そこにはすまなそうな表情の真がいた。明日奈はあはは、と笑うと真を中に招き入れた。

「お、来たね。」

「…失礼する。」

「まあ、遠慮しないで。」

気さくに話しかける明日奈に対し、真は久し振りに来たせいかな、やはり若干の硬さがある。

「…すまん。」

中々遠慮が抜けない真に、明日奈は爆弾を投下した。

「後で一緒にお風呂入ろっか……………あれ？」

朗らかに笑って振り向くと、そこには開いた扉しか残っていなかった。

明日奈が固まっていると、真は扉の影からおずおずと顔を出した。

「真、可愛いわね…。」

これは明日奈の…もとい、世間一般の感想になりそうである。

大方、風呂は嫌だったのだが、夕飯は逃せなかったのだろう。

明日奈の感想にムツとした真は、そのままの体勢で「可愛くない。」と言った。

「ははは、とりあえず中入りなよ。」

こうして真は部屋に入ったの、だが。

「…俺も手伝う。」

「ちょ、アスナ〜！シンのこと止めて〜な〜！」

「任せろっ！」

以前、電子レンジを爆破した前科のある真は見事に台所から強制離脱させられたのだった。

ちなみに。

その後、真は風呂にまで連行され、久し振りの羞恥に気絶したのだ
った。

10 嵐の前の静けさ（後書き）

自分の書くオリ主はよく気絶します（笑）

11 波乱万丈の始まり（前書き）

ちよつと時系列がおかしいかもしれません。

11 波乱万丈の始まり

真が麻帆良へ戻ってきて数日が経った。

女子寮、真の部屋では、久し振りに着る女子の制服を持って15分近く逡巡する真が毎日のように見られる。

「……仕方がない…」

今日もまた、深すぎる溜め息を吐きながら、真はスカートに足を通した。

勿論、下には短パンを履いている。

そして、部屋の隅に置いてある女物の服数着に目をやり、再び溜め息。

折角出来た『娘』にかわいい服を着させようと、養母が買ってきたものである。

此方へ来たときの服は、そのうちの1つである。

「…っと、やべえ…」

時計を確認すれば、何時の間やらいつもの登校時間を過ぎていた。

尤も、普段の真の登校時間は早すぎるため、丁度よい時間帯ではある。

真は手軽に朝食をすませ、部屋を出る。

料理したくても、アスナ達とのキッチン使用禁止を律儀に守っているため出来ないために、買い置きの簡単なものだ。

制服の上から羽織ったパーカーのポケットに手を突っ込み、ipodにつけたヘッドホン――アルバイトで貯めた金で購入――で曲を聞きながら道を歩く。

ポケットの口すぐの手首には相変わらずの学生鞆がかかっている。腰には大きめのウエストポーチ。

初日のサブバッグのような鞆ではない。

あの鞆は数日前、真名に渡してある頼みごとをした。

真は学校が近付いて来たのを確認すると、ヘッドホンを外して学生鞆に入れた。

校則違反だし。

そのまま学生鞆を持った手を肩へやり、歩く。

「なんですってこのクソガキヤー!!!」

ふと聞き慣れた怒鳴り声のした方を見れば、アスナが10歳位の少年をアイアンクロ―している。

――何やってんだ神楽坂…

真は心の内で嘆息すると、そちらへと駆け寄った。

横の木乃香に質問すれば、

「アスナに失恋の相が出てる〜言うてたよ〜」

と返事が帰ってきた。

「…神楽坂、やり過ぎだ。」

真はアスナの手を外してやり、少年の髪の毛を軽く直してやる。

「あ、ありがとうございます…」

「ちょっとシン！なんで止めるのよ！」

二人にそれぞれチョップをしてから、真は木乃香のところへ戻った。

「やあ、お疲れ様だね真くん。ネギ君も遅れてすまない。」

「あつ、タカミチ！」

「た、たたた高畑先生！！」

似たような反応で喜色を示すネギとアスナを見て、木乃香と一緒に苦笑を浮かべた。

「……俺は先に教室に行く。」

「ちょっと待ってくれ真くん。君も来てくれるかい。」

そのまま教室へ行こうとしたのだが、タカミチに止められてしまった。

真は困惑の色を浮かべつつも頷き、いつの間にやら走り去っていたアスナと少年を追って駆け出した。

「学園長！このガキが先生ってどういうことですか！」

扉の中から怒鳴り声が聞こえてくる。

タカミチと木乃香はそのまま扉を開けて中に入っていく、真もその後続いた。

——しかし…子供が教師、か…。

何処かで聞いたような話だな、と真は思った。

「さて、真くん。それでいいかの？」

突然話しかけられ、真は顔を上げた。

「……何がだ？」

言い切ってから敬語を使っていないことに気づいたのだが、まあいいか、と思考を断ち切った。

「聞いていなかったのかね？ネギ君をアスナくん達の部屋に泊める、という話じゃ。」

「…は？」

何故それを俺に聞くんだよ、と言いたくなった。
まあ、口には出ないが。

アスナを見ると、必死に首を横に振っている。
木乃香は相変わらずのぼわぼわした笑顔だ。

対照的な二人の仕草を見て若干首を傾げつつ、真は返答した。

「……別にいいが。」

アスナの嫌そうな顔。

全く聞いていなかった真にはいまいち話が読めない。そんなんだから成績が絶望的なんだよ。

一足先に学園長室を出て。

「なんで頷いたのよ～～！」

真はアスナに肩を掴まれ、前後にがくがくと揺すられていた。

「……おい、…やめ…神…坂」

「あ、ごめん。」

顔色が青くなっている真を見て、慌てて手を離す。
真はいきなり手を離され、強い酩酊感によってへたり込んでしまった。

「ちょ、大丈夫？」

「お前の…せいだ…うぷ」

不快感を抑えるように口に手をやり、暫く堪える。保健室に行こうか、と提案するアスナを手で制する。

5分後。

「いやゝ…ごめんね。」

とほほ、と頭をかくアスナを小突いてから、ふと思い出したことがあった。

——こっちにいた頃に一回だけ見た夢…あれは何だったんだ？

怨嗟の声、復讐に燃える声。

それだけがただただ続いただけ。

まさに悪夢、といったものだった。

今のショックで思い出したのかもな、と苦笑を漏らす。

「ところでさー、私のことはアスナでいいって言ったでしょ？」

「……アスナ、か。」

「そうそう。神楽坂じゃ堅苦しいでしょ？」

分かったよ、と手をひらひらと振って、真はアスナと歩き出した。

もう予鈴は鳴っている。

取り敢えずホームルームで、新任教師——ネギというらしい——が魔法使いだということが分かった。

全員の見ている前で、障壁を張った状態で黒板消しトラップを受けたのだ。

結果は明白。

受け止められ、勘のいいアスナは今も消しカスを投げつけている。

「アスナさん！何をなさっていますの！？」

とうとう筆箱を投げようと振りかぶったところで、委員長、雪広あやかに止められた。

そのままぎゃあぎゃあと騒ぎ出す2人を苦笑いで見守るクラスメイトと、收拾つかずに慌てるネギ。

真は本日幾度目になるか分からないため息を吐き出し、机に突っ伏した。

放課後。

帰宅しようとした真に、クラスメートから声がかかる。

「ちょい、シンちゃん。ネギくんの歓迎会やるから待ってよー。」

ああ、そういえば俺もやってもらったな、と思いつつ、真は片手を上げて荷物を下ろし、手伝いにかかった。

「ようこそ、ネギ先生ー！ー！！！」

果たして、なんとか上手く始まった歓迎会。

真はネギ周辺の喧騒から離れつつ、料理をぱくぱくと食べていた。

“こちら”に来てからの真の食欲には、目を見張るものがある。

さながら、腹ぺこ騎士王の如く。

……いや、虎か？

益体のないことを考えつつ、手と口を動かし続ける。

ふと、肩が叩かれた。

振り返ると、裕奈がいた。

首を傾げる真に囁きかける。

「あのね…あたしも：「おゝい！裕奈ゝ、シンゝ！」…あとでいいか。いこっ！」

まき絵に呼ばれ、言葉を中断して騒ぐクラスメート達の元へと向かって行った。

真は首を傾げつつも、裕奈を追随した。

11 波乱万丈の始まり（後書き）

今回はここまで。

真の戦闘スタイルをどうするか、募集します。
三種の神器以外の武器もあります。

12 惚れ葉の騒動（前書き）

割り込み！この話を詳しくしたかった。

12 惚れ薬の騒動

翌日。

——どうしてこうなった：

真は心の中でまたしても嘆息した。

「ネギく〜ん!!」

「待あって〜〜!!」

「ネギ先生〜!!」

こうなった原因を知るには、この日の放課後にまでさかのぼることとなる。

「・・・はぁ・・・どうしましょう。」

ネギは、昨日の歓迎会でアスナを怒らせてしまったことを後悔していた。

今は一人、階段に腰掛けてたそがれているところである。

「・・・どうした。」

そこに、ふと通りかかって声を掛ける真。

無愛想なだけで、基本的には優しいのだ。

「あ、真さん・・・」

ネギは初対面の時にアスナとの仲介をしてもらったこともあり、名前は覚えている。

何かあったのか、と視線で問う真に、ネギはぽつぽつと語りだした。

「もし・・・真さんが心を読めるとして・・・」

「アス・・・ある人に『ある人が自分のことをどう思っているか知りたい』と頼まれて、読みました。」

「それで、自分がやってしまったことが原因での『その人の恥ずかしいこと』が印象に残っていた、と伝えてしまったんです。」

「それでその人のことを怒らせてしまったんです。」

「なんとかして、仲直りできないでしょうか・・・？」

ここまで聞いて、真の頭の中は、1つのことで言い表せる形になった。

「・・・・・・？」

「-----これだ。」

真と一定時間以上付き合っている者なら誰もが知っていること。

『真は、馬鹿だ。』

一度は個人名さえ出しそうになったネギの説明を聞いても、まったく要領を得ないのである。

「・・・気持ちが悪ければいい。」

これだけ聞いてイマイチ理解できない、では格好がつかないため、真はかなりぼかして伝えた。

「あっ・・・」

しかし、ネギには何かしら思うところがあったらしい。

真はそれを見ながら、どこことなく満足げに見える顔で頬をかき、その場を立ち去る。

そこには、怪しい笑みを浮かべたネギが残されていた。

はたして、このしばらく後。

「アスナさん！これなら絶対大丈夫ですから！」

「そんなに言うならあんたが飲みなさい、よ！」

も。っ！という声を上げながら、ネギが口に試験管を突っ込まれる。

アスナがネギをなんとも思わないため、やはりパチモンだ、と騒ぎ立てていると、木乃香がやってきて、ネギに話しかけた――

「ネギ君って・・・なんかかわええなあゝ・・・」

――のだが、突然目つきが怪しくなった。

これを見て、アスナが驚きに声を上げ、それに驚いたクラスメートたちが次々にやってきて――

・・・どうしてこうなった。

冒頭の独白へと戻る。

大勢に追いかけられるネギを見送った真は、横のアスナに目をやり、目が合う。

「「・・・くく」」

なんとなくお互いに苦笑して、真はそのまま踵を返して歩き出した。薄情者でない。ただの戦略的撤退である。

13 図書館島への潜入（前書き）

ツイッター始めました。
詳しくは活動報告の方を。

13 図書館島への潜入

とある日のホームルームの時間。

ネギが何やら切羽詰まった表情で教卓に上がっていた。

クラス中（主にあやか）が心配する前で、口を開く。

「え、えっと、皆さんが学年末テストで最下位を脱出してくれないと、大変なことになります！」

『え…ええー…！?!?!?』

…大変なこと？

みんなが絶叫するなか、真は首を傾げた。

大方クラスメート達は留年とか考えているのだろう。

試験勉強に精を出すはずだ。

自分のことを棚に上げて考えている真馬鹿だった。

実際には、彼女等が狼狽えていたのは、『テストで最下位になると小学生からやり直し』という噂の信憑性が上がったからだ。

それから、ネギが言った言葉には、『してくれないと』『大変な』の間に『僕が』が入る。

授業後。

いつも通りに机に突っ伏して授業の疲れを癒していた真の耳に、バカレンジャー達の会話が飛び込んできた。

「魔法の本？」

「そうそう。持ってるだけで頭がよくなるんだって！」

それは欲しいな、とぼんやり考えていた真だが、次の言葉にガバリと身を起こす。

「それが麻帆良の図書館島に在るんだって！」

その時の真の表情は、それはもう驚きとやる気に満ちあふれていた。

友人Aの証言

「いやー、あそこまでやる気満々の真は初めて見たわ。」

「……俺も行く。」

真が言った言葉に、バカレンジャー達は反応した。

「お、シンも行くの？」

「じゃあバカレンジャー十数人で図書館島に行こー！」

そして、すぐに集合時間と場所が決められた。

こうして、図書館島へと行くことになったというわけである。

夜、図書館島入り口。

「…なんでネギがいるんだ。」

予想外の出来事に、真は頭を抱えそうになった。

「い、いえ、みなさんだけでは不安ですし…」

ネギの言葉に、真はもう麻帆良に来てから何度目になるかわからない溜め息を吐いた。

これでは録に身体強化も使えない。

……まあ、アスナがいる時点で無理なのだが、真がそれを知る筈もない。

結局、全員で向かうことになった。

道中、何度か真がはぐれかけたものの――途中で面白そうなものを見つけた――なんとか無事に図書館島へと辿り着くことが出来た。

「ここが図書館島ですかー!! おっきいですねー!!」

「……………広い。」

ネギが大声で叫び、真がいつもより長い沈黙の後、ポツリと漏らす。

ちなみに今は、真がアスナと木乃香に手を繋がれている状態。もうはぐれないように、だそうだ。

二人に比べると真は幾分小柄なので、二人の姉と手をつないだ妹のようだ。肌と髪の色が全然違うが。

アスナが提案し、全員（真を除く）が賛成した。そして中で一番仲のいいアスナ達2人に任された、というわけだ。

真は最初抵抗したのだが、他のみんなの顔を見てそれを諦めた。

縄のような目で見られれば、断ることなど出来ないだろう。

どうやらそれだけ困らせてしまったようだ。

真は自業自得と割り切って、あるいは半ばやけくそになって手を繋がれていた。

と、状況を考えているうちに先へと進み始める。

2人に手を引かれ、真は少し駆け足になって進み出した。

「足下気を付けて欲しいです。」

という夕映の言葉に従い、流石に危険の在る場所では手を離れたが、それから、アスナが何度もネギを気にかけていたのが目に付いたために、真は何があったのか、と疑問に思った。

さて。

「……何故俺が。」

「いいじゃんいいじゃん。楽しそうだし。」

「…嫌だ。」

今、どうして押し問答をしているかと言えば、理由は簡単。

「ツイスターゲームくらいやってもいいでしょ？」

これだ。

動く&喋る石像によって出されたツイスターゲームに参加する、という話。ちなみにこの石像の声、どこかで聞いたような覚えが。

かなり広いところでやるため、原則全員参加という形なのだが、真

に女子と密着など無視できる筈もなく。

必死に抵抗している。

「シンのせいでこんなに時間が掛かったんだから、シンがやらないのはナシだよ!」

それを言われてしまうと辛い。

自分でも気にしていたのだ。

うつ、と呻いた真に、バカレンジャー達はここが好機とばかりにたたみかける。

「これ以上時間掛かったら誰か来ちゃうかもよ?」

「ちょっとゲームするだけでござるしな。」

「私達とゲームするの、嫌かえ?」

ついに泣き落としてである。勿論嘘泣き。

しかし馬鹿な真は泣き真似に見事に騙されてしまった。

「……分かったよ畜生。」

途端に嘘泣きをしていた木乃香が顔を上げる。

「よし、じゃあやるえ。」

——嵌められた…

ここでも、やはり真は溜め息を吐くのだった。

真が顔を真っ赤にしながらも、ネギのアドバイスによってゲームは順調に進んでいた。

「では最終問題じゃ。『DISH』」

やはりどこかで聞いた覚えのある声で最後の問題が出される。これが解ければ魔法の本も入手出来るのだ。

「こんなの簡単です。『お』」

押したのは夕映。しっかりと『お』を押している。

「……あれか。『さ』」

周りに任せきりで自分では何も解いていない顔が真っ赤な真。押したのは『ち』。…え？

しかし誰も気付いていない。

「魔法の本ゲットよ！『ら』！」

かなり嬉しそうな表情のアスナ。押したのは『る』。

「…え？」

喜びかけていた全員の動きが止まった。

「そこの白髪の子の手も見てみるのじゃ。」

「……え？」

「という訳で、奇しくも文字通り『おちる』ことになった訳じゃな。」

石像は底意地の悪い笑みを浮かべると（見えないが絶対そう）拳を振りかぶり、床を打ちつけた。

途端に碎ける床。

落ちるバカレンジャー達。

「落ちるー！！！」

「うわーん！二人とも馬鹿あー！」

真はみんなと離れ、赤みがぬけ始めた顔で周囲を見回す。

体力のある何人かが周囲の他の何人かを掴んでいたの、真は取り敢えず一人で一番近くにいた木乃香をひつつかみ、自分の体を下に向けて受け身を取りやすい体勢になった。

ちらりと下に目をやれば、そこには水面が近づいて来ている――

ここで、真の意識は途絶えた。

ぶつんっ。

13 図書館島への潜入（後書き）

今回は区切りが短いな・・・

14 図書館島の地下で（前書き）

．．．．．どうなんですか？

これ。

真、べつに可愛いキャラで行こうとか当初は全然考えてなかったんですがね．．．

ここだけの話。

14 図書館島の地下で

ブウン…

真っ暗な意識の中で、1つの灯りが見えた。

真はそちら側へと意識を向ける。

『……………あ。』

まるでテレビのように、映像と音声が流れる。

画面に映っているのは、

「……………俺？」

そう、真だった。

それも“向こう”の。

『……………ああ、そう言うと、あんたはボクってことになるね。』

あちらも驚いているようで、目を丸くして喋る。

なんだか、自分の体が饒舌だというのも、違和感がある。

「……………名前は。」

『あれ、知らないんだっけ。……ああ、戸籍ないものね。』

画面の『真』はそう言って、ゴホン、と咳払いをした。

『ボクは黄泉月。黄泉月斬又。よみつきざんぐ読み方には少し無理があるけど…』

真、いや、黄泉月斬又はそう言うのと、真を見た。

『君はこの『照天真』でいいんだよね。』

自分の体を示しながらの斬又の確認に、真は頷いた。

「……お前は、女だよな？」

『うん。斬又なんて名前だけどね。』

真の質問を肯定すると、斬又は小さく頬をかいた。

「……何故俺とお前が入れ替わった？」

再び真の質問。

斬又は困ったように顔を歪めると、一拍の間を置いて話し出した。

『胸の傷には気付いた？』

頷き、ある場所を触る。

胸の少し下。丁度心臓の真上に当たる。

『ボク、それで死にかけちゃってさ。同時に致命傷を受けた誰かと入れ替わる代わりに、その両方の怪我が治る魔法を使ったんだけど……』

まさか異性、しかも異世界だとは思ひもなかったよ。

そう続けて、相変わらず困ったようにトホホ、と笑う。

いや、しかしだ。

「…………俺が致命傷を？」

『…………覚えてないの？』

キョトンとして———もともと、無表情だが———真が問うと、斬又は目を見開いてから、額に人差し指を当てて何か考え込むようにし「まさか……いやそんなはずは……」と言うと、バツと顔を上げた。

『多分だけど。傷を受けたときのショックで記憶が飛んだのかも。』

その言葉に隠された『嘘』を見抜けなかったのは、やはり真が馬鹿だからなのだろう。

真は納得したように頷き、さらに次の質問を口にした。

「…………何故今話せる？」

斬又は今度はすぐに答えた。

『儀式に使った道具とかがその近くにあるんじゃないかな。そこは

麻帆良の図書館島あたり?』

斬又の確認に、真は頷く。

しかし、この性格では、今までの自分とは差が出過ぎるのではないだろうか。

そのことを察したのか、斬又は真が質問を口にする前に言葉を発した。

『ああ、うん。そのことに関しては、転校することになった。まさかあんたがそこまで無口だとは思わなかったよ。』

真はそれを聞いて「…悪い」と頭を下げた。

斬又はそれを聞いて、驚いて声を上げた。

『な、なんで謝るのさ?』

「……………迷惑かけたからだ。」

『普通ならあんたが何勝手に入れ替えてるんだ、とか怒るべきなんだけど…』

「……………助けてくれたんだろ?」

感謝こそすれ、怒ることにはならない。

前触れなく入れ替わることになった理由を聞いた驚きから、見落としがちになるその点。

しかし、真は見落とさなかった。

馬鹿故のことか、いずれにしろ、斬又はふふふ、と笑うと、湿り気を帯びた目尻を小さく拭って言った。

『まったく、あんたは馬鹿だな。びくびくしてたボクが馬鹿みたいじゃないか。』

それから、ふと気付いたように続けた。

『そろそろ時間だ。じゃ、縁があつたらまた会おう。』

そして、

ぶちん。

テレビのような画面は消え、

「……きて！シン！…起きてってば！」

意識の向こうから、声が聞こえてくる。

そして真は、目を覚ました。

「あ、シン！大丈夫？」

心配したネギと、アスナ達バカレンジャーが寄ってくるが、真は少し上の空だったため、ぼうっとした目つきで首肯しただけだった。

「ねえ、本当に大丈夫？」

「なんかぼーっとしてるえ〜？」

「今にも倒れそうでござるな。」

やはり意識が何か別の所にあるような真を心配し、楓が真をひよいつ、と抱える。

「……………?!?!?!?!」

途端に…いや、暫くの間の後、顔を真っ赤にする真。それを見て、アスナ達はさらに心配そうな顔をした。

「ねえ、本当に熱とかあるんじゃないの？」

「…?!?!?!?!?!」

今度はアスナが抱えられたままの真の額に自らの額を当てる。さらに赤くなり…もう悪循環である。

4回程繰り返すうちに、

「……………きゆう〜」

奇妙な音を発して、りんごも裸足で逃げ出すほどに赤い顔をした真は気を失ってしまった。

「あ、やりすぎちゃったみたい。」

まき絵の言うように、やはり楽しんでいたようだ。

しかし、それも何か悩むような顔をしていた真の気を逸らすためなのだった。

……確かに、真っ赤に染められ続ける真の顔が見たい、というのはあったが。

真が目を覚めたのは、それから2時間程後のこと。

近くには優雅に寝そべる木乃香と夕映がいた。

「あ、目が覚めたようですね。」

「みんな、シンが起きたえ」

木乃香が呼ぶと、ネギが他のバカレンジャーを引き連れてやってきた。

「シンさん、大丈夫ですか？」

ネギに頷いて返したところで、

「……忘れてた。」

「え？何を？」

アスナが聞き返したのにも気づかずに頭を抱えて溜め息を吐く。

——神器について聞くのを忘れるとか：

真はかなり後悔していた。

あの武器は何なのか聞くチャンスだったのに、それをみすみす棒に振ってしまったのだ。

しかしすぐにさっき気絶した原因を思い出し、慌てて顔を上げる。

幸い、まだそのことは思いついていなかったようで、アスナ達は目をぼちくりさせていた。

真が何でもない、と頷いて示すと、ネギが言った。

「えっと、じゃあシンさんも入れて、みんなで勉強しましょうー！」

途端、真の顔が青くなった。

確かに『魔法の本』の入手が出来なかった為に、勉強して少しでもいい点を取らなければならないのは自明の理ではあった。

が。

真としては勉強自体も嫌だったが、何より麻帆良の外にいた18ヶ月にあったテストの勉強を教えてもらった時の『女子にとっての普通のコミュニケーション』が嫌……というより、精神衛生的に來るモノがあったのだ。

「……………俺は、一人でや「できるん？」……………」

何とか逃げようという目論見も、木乃香に痛いところを突かれ、呆気なく潰える。

自らの顔を隠すように眉間を人差し指と親指で揉みながら、真は少々頷いた。

「……………分かった。」

とまあ、このようにして真はやむなく他のバカレンジャーと共に勉強することとなったのだが、

「えっと…シン、さん？」

「うっわ…」

「ごめんなシン。これはフォロー出来ひん…」

地味に木乃香の気遣いが一番キツイ。

アスナを越す馬鹿とは…

シンの方は、いつも通りのためか、周りよりも動揺が小さい。

「ええっと…シンさんはマンツーマンで教えたいんですが…僕は皆さんのがあるんで…どうしましょう…？」

「あ、しゃあウチがやるえ。」

渡りに船、木乃香の助け舟に、ネギはよろしくお願いします、と頭を下げた。

「それじゃあ、あっち行くえー。」

ドナドナドゥナドゥナドゥ仔牛を乗せて

2人きり、という状況になることを知った真の顔は、ドナドナが聞こえてくるかのようにだった。

そして、3時間後。

「じゃあ、休憩やえ。」

木乃香の声に、真は大きく息を吐いた。

そのまま伸びをし、立ち上がって散策を始める。

地下図書館はかなりの広さがあり、真は取り敢えず誰もいないうちに水浴びをしておくことにした。

水辺まで来ると、着ている服を畳んで脇の地面に置いておく。

水が冷たすぎないことを確認してから、音が立たないように爪先からゆっくり入っていった。

誰かに音を聞かれれば、自分達も入る、とやってくるかもしれない。何よりネギは真の胸の傷痕を知らないのだ。

何かに刺し貫かれたような痛々しい傷痕は、何度見てもあまり慣れるものではない。

アスナ達は気にすることは無い、と言うが、やはり一緒に風呂に入る……いや、押し入るときには最初にちらりと胸を見る。

全く気にしない、というのはどうしても難しいのだ。

尤も、順応性の高すぎる彼女らは、近頃では育ち始めた真の胸部を見ているのだが、真は未だに気付いていない。

風呂に入るときには顔しか見ないようにしているのだ。

自分の身体ですら見れば顔が赤くなる真だった。

と、そこで岩陰から水音が聞こえてきた。

慌てて音の反対側に回ろうとしたのだが、慌てすぎたせいか、足を滑らせてしまった。

ばしゃあん！

結果、転びこそしないものの、体勢を立て直す際に広げた腕で大きな水音を立ててしまった。

真は観念したように一度手で顔を覆うと、岩陰に目をやった。

「……………あ」

真っ赤になったネギが見える。

真は安堵の溜め息を吐き出し、ネギを引っ張って自分の膝の上に座らせ、そのまま何も言わず、何も考えずに暫くぼーっとする。

今の真は機嫌がいい。

自分が立てた水音とか、ネギがちらちらと見ている自分の身体とかには全く気付かない。

馬鹿である。

相変わらず泡を喰っているネギを見ながら、再び安堵の息を吐き出した――――

「あ、真とネギだったのね。」

――――ところで、アスナと木乃香、夕映が顔を出す。

真は数秒の硬直の後、自分が先程立てた水音のことを思い出し、深い後悔に捕らわれた。

結局、初心な真はネギともどもアスナ達3人と、呼ばれてやってき

た楓、古、まき絵に気絶しない程度にいじり倒され、心身ともに疲れ果てて水から上がったのだった。

14 図書館島の地下で（後書き）

感想下さいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!

執筆して欲しかったら、ブツをだすんだ（ジャック・バウアー風）

もうなんかね、面白いですとか、つまらないですとか、作者死ねとか、なんでもいいんで。

なんかアクセスだけ見てると増えてはいるんですが・・・

面白いのか否か、聞きたいです！

15番外 18ヶ月前の事件（前書き）

会話文が多い・・・

こっちは語りを多めにしようと思ってたんだが・・・

15番外 18ヶ月前の事件

「……………よし。」

その日真は、珍しく短時間の葛藤で制服を着ていた。

今日は、作戦決行の日である。

計画、というのは、タカミチが“向こう”の真を知っているかどうか確かめる計画である。

いつもより少しだけ女の子らしい格好をすれば、精神が女の子化したことに動揺するか、あるいは喜ぶかするだろう。

そこに直接聞くことで、精神的な隙を突ける、と考えたのだ。

：勿論、真の考えた計画だ。拙いのは仕方がないだろう。

少し袖の長いパーカーを羽織り、鞆を持つ手を肩に引っ掛けて、真は通学路を歩いていた。

いつもはまとまりなく後ろに流している真っ白なセミロングの髪は、後ろで纏めている。

しかし、躊躇い時間が短かったため、真が投稿する時間はいつも以上に早い。

教室に入ってから時計を確認すれば、投稿時刻より1時間も早かった。

「……………」

なんだか拍子抜けしたような顔をして、真は自分の机に突っ伏した。



目が覚めると、真はうなじのあたりに違和感を感じた。

何というか、風通しが良くなっているのだ。

教室内には、既に生徒の七割が登校して来ていた。

頭に手をやると、後頭部で髪の毛の束に当たる。

真は不思議がりながら、裕奈に手鏡を借りることにした。

「……………鏡、貸してくれ。」

「んー？ いいにゃー。」

何か含みありげな裕奈にも気付かず、鏡を見る。髪は見えづらく、多少手こずった。

「……………」

啞然とした。

鏡に映る少女の髪型は、ポニーテールになっていたのだ。

今日は、うなじのあたりで髪を結っていたのだが。

後頭部にあるゴムは、真の真っ黒な飾り気のないゴムではなく、小さな可愛い飾りのついたものだった。

誰がやったのか聞いても、どうせ分からないだろう、と思いつつゴムを外そうとして、

「……………あ。」

ふと手を止める。

——計画が進みやすい…

羞恥心を押さえつけ、真は髪から手を離れた。

放課後のこと。

真はいつもより軽い威力のチョークに、タカミチの動揺を誘うことに成功した、とほくそ笑んでいた。無表情で。

タカミチには、既に休み時間のうちに手紙を渡している。

『高畑先生』

放頼俊校舎裏にて待つ』

……本人としては、大真面目に書いているのだ。

こうして自信満々で校舎裏へとやって来たのが、それを証明している。

タカミチもなんとか解読出来たらしく、10分程してからやって来た。

「……真君、今度漢字の補習だよ。」

タカミチの第一声を聞き、真はあやうく膝をつきそうになったが、危うく踏みとどまった。

「それで、用事ってなんだい？」

何度かぱくぱくと口を開きいて言葉を探す。

「ん？」

「……お前なら、本当の俺を知「ちょおおっと！ごめん！来て！」

っているんじゃないか？と続けようとして、真の言葉は誰かに遮られる。そしてそのままずるずると引きずられて行ってしまった。

残されたタカミチは啞然として、引きずられて行った方向を見ながら、ぼつりと呟いた。

「一体、なんだったんだ…？」

一方こちらでは。

「……………何するんだ。」

真は早乙女ハルナと綾瀬夕映と話していた。

言わずもがな、真を連行したのは彼女らである。

後ろの方でおろおろしている宮崎のどこをチラリと見やっってから、真は再び訪ねた。

「……………何の用だ。」

「ねえ！今高畑先生に何しようとしてたの？」

被せるようにしてまくし立てるハルナに気圧されながらも、何とか返答する。

「……………聞きたいこと…言いたいことがあった。」

途中で言い直した真の言い方に、何を勘違いしたか、2人…いや、

3人は興奮する。

「…まさかとは思ったですが…」

「アスナに報告よ!」

「え、えっと…」

そのまま電話をかけるハルナに底知れない寒気を感じながら、真は動かずにその場にいた。

アスナは2分で来た。

それはもう、自動車顔負けの速度で。

「シン! パルの言ってたこと、本当なの!？」

真はしどろもどろになりつつ、アスナの問いに頷いて答えた。
……よく分かりもせずに。

アスナは額に手をやってうなだれる。

「…確かに…髪型もシンにしては気合い入ってたし……あたしらが可愛くしても外さないし……」

「……もう、行っていないか。」

真の言葉にがばりと身を起こし、アスナは聞いた。

「最後に1つ！どうして高畑先生なの？」

真は困惑しながらも、律儀に答える。

「……………呼び方と、笑った顔。」

が、疑うきっかけになったのだが、アスナがそんな事情など知るはずもなく。

「……………そっか…じゃあシン、負けないからね！」

赤面しながら言われたその言葉に、真はなんのことか、と首を傾げた。

真が校舎裏に戻ると、丁度タカミチが職員室に戻ろうと歩いているところに出くわした。

「……………あ。」

「ああ、真君、さっきの用事って一体なんだったんだい？」

タカミチの問いかけに、真は唸る。

「……………聞きたいことがある。」

先を促すタカミチをちらりと見上げて、真は続けた。

「……………お前は、俺が何だか知ってるのか？」

タカミチは目をそらして、聞き返す。

「えーっと…真君は真君だろう？」

真は不明瞭な答えに、いらいらと頭を振った。

「…………性別だ。」

此処まで来て、ようやくタカミチは察したらしい。

ハッとした顔になって、少し慌てたように答える。

「あ、ああ、大丈夫だよ。」

その、少しの慌てを見て、真の疑いは確信へと近付く。

「……………だったら、なんで『真君』なんだ。」

「えっと、僕は基本的に生徒はそう呼ぶんだけど…嫌かい？」

へ？と真は間拔けな顔になった。

しばらくの硬直の後、ようやく合点が行ったらしく、今までの自分の言動と周囲の反応を照らし合わせる。

「……………はあ…。」

真は、額に手をやって溜め息を吐いた。そして、

「…………勘違いするなよ。」

タカミチにそれだけ言って、走りだした。

残されたタカミチは1人、頬を掻く。

かなりのスピードで走りながら、真は辺りを見渡した。

そこで、街を歩く木乃香と目があつた。

「あ、シン〜。どうしたん？」

「……………アスナを見なかったか？」

木乃香は、ええっと、と可愛らしく顎に手をやると、すぐにポン、と手を打った。

「アスナやったら、たしかタカミチ先生を探してるはずやえ？」

「……………そうか。」

ぺこり、と頭を下げて来た道を引き返す。

「なんかあったん？…って、行っちゃった…。」

困惑したように首を傾げて、木乃香は歩き出した。

一方こちらは再び学校へと向かう真。

彼女は、内心焦っていた。

——誤解、解かないと…

いくら真が馬鹿でも、自分が明らかにタカミチに告白しようとしていたようにしか見えないことに気づく。

まずは「負けないから」と言っていたアスナだ。

校門に入り、校舎裏を通過したところで。

「あ、あの…高畑先生。」

どこかから声が聞こえてくる。

真がそちらに目をやると、アスナがタカミチに向かって話しかけていた。

影から様子を窺う。

「シンには…なんて返事したんですか？」

「え？…それなら、『大丈夫だよ』って言うておいたけど…」

そこで、アスナの顔が絶望に染まった。

「そう……ですか……」

それだけを言って、走り出す。

真がタカミチの方を見ると、皆目見当がつかないようで、首をひねっていた。

そして、真は慌ててアスナを追って走り出した。

アスナの速度はかなりのもので、真でもなんとか追いつける程度のものだった。

「……………アスナ。」

真が声をかけるとアスナは立ち止まり、こちらを振り向く。

彼女の目には、涙が浮かんでいた。

「……………何よ？」

「勘違いだ。」

その時の真は、いつもよりもはつきりと喋った。

「俺はタカミチに質問をしただけ。」

「……………へ？」

茫然とするアスナに、真は続ける。

「……………告白はしてない。」

「じゃ、じゃあ…」

漸く希望を取り戻し始めたアスナに、真は大きく頷いてみせた。

「……………まだ大丈夫だ。」

アスナの涙は嘘のようになくなり……………彼女の顔は真っ赤に染まった。

「え？じゃあ……………もう無理よ！」

はい？と聞き返す真に、アスナは真っ赤なまま小声で叫ぶという芸当を披露した。

「だから……………もう恥ずかしくて告白なんて無理！」

「……………強制はしない。」

どこことなく残念そうな表情で真は言い、

「……………じゃあな。」

とアスナに別れを告げて、寮へと戻った。

翌日。

「そういえば、昨日は真君、随分可愛らしい格好だったね。」

「……………」
「忘れてくれ。」
「」

15番外 18ヶ月前の事件（後書き）

駄文ですみません。

感想を貰えると更新スピードが上がる・・・はず。
よって感想ください。

「こうしたらもっと面白くなる」とか「こういうキャラを出して欲しい」とかの具体的なアドバイスもあると嬉しいな！
あと。

未だに真に恋愛させるか友情させるか決めてないので。

「男と」「女と」「友情で」のどれかのアンケート、お待ちしています。

その相手も募集！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7307w/>

ネギま！に入った人。TS 憑依ver

2011年11月11日23時47分発行